
渡り鳥の詠う詩

レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渡り鳥の詠う詩

【Nコード】

N4820S

【作者名】

レン

【あらすじ】

異世界転生系俺Tueee物語、ハーレムも有るよ！みたいな！

始まりの前

誰かに誇れる人間に成りたい。そう思っていた。

戦時中の軍人であり、そしてそれ以降も軍人であり続けた祖父。

そんな祖父の背中を見て育ち、軍人ではないが『祖父が守りたかったこの国を

この平和を維持する』そんな組織に入った父。

そしてその父の息子である、自分。

早くに母を亡くしたが、優しい祖母という揺り籠に育てられた自分。

厳格で岩のような祖父、優しく暖かい祖母、軽薄なようで暑苦しい父。

その三人に育てられた私は、自分にそして他人に誇れる人間に成りたいと渴望していた。

『戦争に出た軍人』というだけで下賤な輩に誹謗中傷を受けようとも、意に反さない強い祖父。人殺しと罵る中傷に、『あの人人が人を殺しているとしても、

どうしようもなく私は愛しているのです』と云ってのけた祖母。

そんな二人を揶揄しながらも、手が白くなるほど握り締めていた父。

そんなどうしようもなく深い絆で結ばれ、どうしようもなく誇らし

い『家族』

何時かそんな『家族』を自分も持ちたい、そして出来ることなら、自分が誇ら

しいと感じるように、自分の『家族』にもそう思ってもらいたい。

それが子供心からずっと持ち続けた夢。

そして『その願い続けた夢は叶った』

半分だけ…。

「つまり、転生系チートオリ主で俺TUEEEE！って事ですよね？」

「簡単に言ってしまうえばそうですが、なんか納得いきません…」

なんか安っぽいなあ…と呟く、目の前の人物を放っておいて考える。

珍しい話ではない、何処にでもある話だ。無論フィクションの中
でだが…

要約してしまうと、死んでしまった俺が哀れで、生き返してやるで
も違う

世界で勘弁な！という事だ。

「だから！貴方の魂の質が！貴方のその渴望が！この世界まで届いたとい

うのが大前提なんですよ！」

「要するに声が大きいなだよテーマって事ですよね？」

「何でもかんでも要約してしまうのは中二病ですよ？」

怒られてしまった…

「はあ、まあ良いです。チャツチャと終わらせてしましましょう」

ちやつちやと能力を決めてくださいと投げやりに言われたので、細かいことは

置いといて考える。

世界とは幾つもあり、何処に行くのか判らないらしい。ロボット系が良い德斯

と張り切った物の判らないと言われた時の失望は計り知れなかったが…。

何処でもどんな世界でも生きていける汎用性が必要なのは確定的で、尚且つ危

険な世界でも生きていけるだけの能力。それにある程度のブーストは掛かるが

例えば『ガンダムが欲しいの！』という本人に直接作用しない物は無理…。

「じゃあ、例えばこんな感じでどうでしょうか…？」

始まりの前（後書き）

続く…！というよりそもそも始まってもない…！

前章

おはようございます。全世界の皆様、七夜 暦でございます。

この名前を見たとき、君は、きっと言葉で言い表せない、『ときめき』みたいなモノを感じてくれたと思う。殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないでほしい。そう思いながら名乗ったんだ。

うん、そうなんだ、『あの』七夜なんだ…。死亡フラグがバリバリだね。

と言いたい所なんだけれども、『あの』七夜と少々趣が違うんだ。

年代が違う？それも有る。人物が違う？そもそも詳しい正式な七夜の里の人間は殆ど知識にないのけれども、『御館様』と呼ばれるこの『七夜の里』の長は黄理では、無い。ので志貴も居ない。

ならば、『同じ七夜だけど名前だけ？』と言われるとそれもまた違う。

七夜の里で、教えられる武術は『暗殺術』であり、あの『七夜』の武術と相違が無い。と思う…。

『七夜』が『七夜』で在る所以でもある、浄眼などの所謂『超能力』これも存在する。これも少々の趣の違いが存在するが…。

唯、少しの相違点、少しの観測点の違いで、恐ろしい程に『世界』が変わる。

前置きが長くなってしまったので、簡単に言ってしまうおつ。

『この世界には、忍術が在る』

そう、魔法・法術でも神術でもなく『忍者が使う術』の意での『忍術』。

それも、『忍』と言いながら全然忍んで無い超ド筈に派手な術だ。火球を飛ばしたり、龍の形した水が飛んできたり…。時空間忍術エ…。

判る人には、判るだろう。此処は、私は、『NARUTOの世界に在る七夜の里』の『人間』なのだ。

7

どちらにしても殺伐とした世界だ！…同じように殺伐とした世界なら、鋼鉄と硝煙の世界が良かった…。

「こよみ〜！修行の時間よ〜」

「はい！母様！今行きます！」

七夜 暦 五歳 きょうもげんきにあんさつじゅつのしゅぎょうです。…殺伐としてイイネエ。

- 檄・檄・檄・檄・檄

『七夜』の真骨頂は体術のみに有らず、『殺すための技巧』それを総じて『七夜暗殺術』と称する。

修行場所として里から貸し与えられている森の一角で斬り合う。

斬るために斬るのではなく、斬るといふ一つの動作を次に繋げ、そしてそれも繋げ、絶つ。

障害物を、武器を、思考を、命を、相手を、断つ。

決して、唯向かい合うのではなく三次元で動き回る。

木を、枝を、幹を、相手さえも利用して…。

- 檄・檄・檄・檄

隙を見出し、隙を誘い、隙に誘う。

思考し、思考を読み、思考を騙す。

- 突

- 檄

幾つモノ偽装を経ての、必殺のタイミングでの片手に握る獲物の投擲。

それさえも囷として、それさえも追い越しての斬戟。

(勝ッッッ) 「甘いです」

勝利の余韻に陥りそうな瞬間に視界の隅に捕らえた銀線を呆然と見ながら、耳朶を打つ涼やかな声に悔しさを味わい、激痛と共に暗転する意識を手放す。

「また負けた…」

あの傍から見たら殺し合い、蓋を開けたら修行という激戦から数時

間。

薬とチャクラという不思議パワーを使った傷の処置を自分の身体で学び、反省点と賞賛点を貰いながら一つ一つ基礎を練り上げた。怪我がズキズキ自己主張するのとか怪我だらけのあとに基礎？なんて疑問は、既にながくり捨てた…。

- どんな戦闘でも無傷で切り抜け、全く体力も消費しないで武器を振る？なんですかその人外は？ -

疑問を呈した時に師匠であり、今生の唯一の『家族』でもある母様に言われた言葉だ。

実践に即した修行だと言う事らしい。普段は立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花を地で行く、涼しげな風貌の黒髪美人なのだが…。ちよつと刃物を持つと性格が変わるのが玉に瑕ッ。

そんな事を考えながら、風呂屋に歩いていく。

この『七夜の里』は火の国に在り、火の国の首都扱いの木の葉隠れの里の影響下に在る。

とは言えども、里の人口は百人に満たないので面積自体は大して大きくなく、発展具合も木の葉の里に比べると『日本の農村』に近しい。それ故に我が家に風呂釜は無い。

しかし、しかしだ！温泉があるのだ！しかも露天風呂付き。

ここを開墾する為にやってきた祖たる『七夜一族』がトンでも忍術を駆使して開墾している最中に、源泉にぶち当たったらしく、里の者なら24時間無料で入ることが出来るのだー！のだー！風呂釜が無いというより、『必要が無い』という事なのだろう。

なので、朝夜の二回最低でも入っています。時々、任務帰りの血だらけの上忍な方に遭遇したりするのが玉に瑕力ナ。月明かりの中、遭遇した時の恐ろしさはちょっと言葉に表せない…。

ソレに遭遇した小さい子が時々泣いたりして可哀想だけど、泣かれました上忍のおっさんの哀愁漂う背中も可哀想だったり。

「おお、曆じゃ無いか、また手酷くやられたねー」

男湯の暖簾をくぐると、番台から声を掛けられた。

「今日こそは一矢報いることが出来ると思ったんだけどねーまだまだだった…」

「そりゃーまだあんた五歳だろ！『七夜の断頭姫』と『七夜の赤鬼』の實の息子とは言え、そうそう勝てるか！」

カツカツカと爆笑している婆さんを尻目に服を脱ぎ籠に入れる。

「いやいや、今日は本当に惜しかったんだよ？母様にも褒められたし」

「わかってるさ、わたしやこの番台に座って云十年、この湯婆の目に狂いは無いよ！あんたは大成する！、だけどまだまださ」

身長つても武器だからねえーとこちらの身体を見ながら溜息を吐く、がこればかりはどうしようもない。

所謂チート状態な私だが流石に、身長を伸ばしたりは…出来なくもなくは無いです？が現状では無理だ。

小さな体躯、何故かある程度鍛えている筈なのにぶにぶにな手足の

肉を見回して、こちらも溜息。

「早く大きくなりたい…」

何が壺に入ったのか知らないが、爆笑している湯婆を放置して、風呂場に向かい取りあえず掛け湯。
基本的にタオル以外は此処に在るのが自由に使えるので、それで頭
→身体→顔→と洗っていく。

シャンプーもリンスも在るってやっぱりこの世界観はイマイチ理解
出来ない。便利だから良いけどね→

此処に在るのもそれなりに良いものらしいが、女の人は持ち込むの
で世の中に出ている種類自体も結構ありそうだ。

そんな事をツラツラと考えつつ、一通り綺麗に出来たら、露天風呂
に向かう。

春で在る現在、まだソレほど遅くない時間では在るが既に日は落ち、
大きな大きな月が出ている。

世界は違えども、空には同じ月が昇る。実際は、全く同じなのかは
判らないが少なくとも見ている分には同じ…。

前世は、家族に恵まれ、今生でも同じく恵まれた。

今生では、父が居らず、祖父が居らず、祖母が居らず、だが母様が

居た。

自我が徐々に生まれる事で、自分を受け入れ、母様を自然に受け入れる事が出来たが、なんともくすぐったい気分だ。祖父の手ではなく、祖母の手でもなく、父の手でもない、母の手で頭を撫でられるのは、何とも言えない気分させられる。

多分、きっと、今生での最大の幸福は、授けられた能力でも、漫画の世界に来たことでもなく、母様に出会えた事だ……。幻想で在った母様、前世を思い悩み泣いたときも何も言わずに抱きしめてくれた。やはり家族とは良いものだ。

願わくば、大好きな母様が誇れる人間で在れますように。 - - 月夜にそう願う。

前章（後書き）

はい、第二話！です！

実質はプロローグにも入ってなかったりします。

NARUTO関係ないですしね。

うちの暦君は、何処に出しても恥ずかしくない転生系チートオリ主です。

しかも、転生が云々だとか漫画の世界がどうか、原作がどうか気にしない！

ただ願いの為に利用するだけです。

渡り鳥の羽ばたき

- 檄・檄・檄・轟・突

深い緑に蔽われる森を赤色が染める。視認して木の幹を滑り落ちる瞬間の三度の斬檄、何が起こったか理解が出来ていないのか呆けている馬鹿の心臓を蹴り穿ち、その時点でやっと悲鳴を挙げそうな間抜けの眉間にクナイが吸い込まれ、その威力を十全に発揮し頭を吹き飛ばして後ろの木に刺さる。

「殺したんだ、殺されもするだろうに」

数だけは多く、群れて狩りをする内に自分も殺されると云うことを忘れてしまったのか、致命的に危機感というものが足りていない、それも山賊として人を襲い殺し、人質を取り身代金を要求してきている立場の癖に…。

「まあ良い、楽なら楽に越したことはない」

しかしこれで都度、六度目の解体劇、どうやら目的の廃寺が見えてきた。

始まりは何時だつて唐突だ。まあそんな風に嘯いてみるが、この時代、この世界では何処でも在るお話だ。それもどんな英雄譚にでも語られるであろう。これはそんなお話。

娘が山賊に浚われて云々かんぬん

実際はちよいと違い、お姫様でも無く、村娘でも無い、七夜の里に縁がある商家の一人娘という所だろうか？年の頃は5歳、私が先月七歳になったから二つ下。里から一日程で着く『街』と表して良い規模の里の商家の娘さんらしい。唯の商家ならば、まだ良くは無いが良い。最悪の中の最善と言える。

しかし、件の商家は拙い。七夜の里は火の国・木の葉隠れの里に属しており、そこから依頼を受けている。だが何事にも例外というものは在り、木の葉を通さずマージンに受ける仕事というのも多々在る。七夜の里のその成立までの歴史の特殊で木の葉マージンが取る中間搾取は多くないが、逆に七夜の『暗殺術』を基盤とした手法の特異性、隠行を持つてしての『暗殺』は致命的までに、忍の運用方法で在る三人一組フォーマンセルや四人一組に適していない。

無論併せる事は出来るが、所詮それは七夜の七夜たる意味を喪失させるに過ぎず、結局のところ攻勢防御部隊扱い　つまりは、表の暗部のようなものだ。そのような扱いである以上、仕事の重要性和知名度から収入は多いが仕事はそれ程多くない。そんなジレンマが生

まれる。

しかし、日々の生活はそれで十全に行えるが何事にも万が一という物がある。

そう考えたこの里を開拓した七夜の長は、縁の在ったその商家と結びつき『火の国、延いては木の葉隠れの里に不利益にならない程度』で直接仕事を請けるようになったらしい。

その商家としては、中間搾取マージンの削減も出来るし、縁もあるが名の在り実も在る忍を後盾に得るといふ素晴らしい効果が期待出来、そして七夜はそれに答えた為に、現在でも巧く行っているらしい。

「つまり、件の商家と七夜は切っても切れぬ中、死ねば諸共一蓮托生ということですね？」

里が少々騒がしいなど、個人的に栽培している薬草・毒草の世話をしていると、御館様に呼び出され長々と語られたが、結局の所そういう事だ。

「まあ、そういう事だな。実際は商隊の警護に付いていた訳でも、その一人娘の護衛の契約をしている訳でもない、がだからといって知りませんで済ませる問題ではない。例えそれが予期せぬことであってもな。あそことは、そういう関係なんだ。」

「まあ理解できません。で、私が呼ばれた理由も判りますが判りたくないです……」

歴史の勉強をこんな事態にさせられる訳も無く、しかもご丁寧に武装をと呼び出されたのに理解出来ないのは空気が読めなさ過ぎる、が理解を『したくない』。これはそういう問題。

「場所はこの里から南に道なりに行つて、交差路を右に真っ直ぐ、この大きな山の裾にある廃寺だ。金を持ってこなければ娘を殺すとな、馬鹿な奴らだ奪つたのなら実りが少なくとも逃げ出せば良いものを…」

華麗に私の発言をスルーし、扇子を使いこの周辺の地図で説明を始める。まあここでゴネても意味が無い。

望む望まぬに関わらず、人は集団の中でしか生きていけないのだ。こつこつということも在る。

「刻限は明日の朝、多分馬鹿は馬鹿なりに考えたんだろうな、木の葉まではその時間では行くことは出来ても、来ることは出来ん。先の大戦などで激減した忍の人員不足で国境や重要施設以外の在中忍は居ないか、下忍数人程度だ。それなら数さえ揃えればどうにでもなる、実際襲われた商隊にも木の葉の下忍が三人付いていたらしいからな」

不意を付かれ、一人は戦死、一人が監視に残り、最後の一人がこの伝令を届けてきたらしい、と複雑な表情で付け足す御館様。木の葉の人数不足と質に対する疑問だとかが渦巻いているのだろう。火の国という国の一部である以上決して他人事ではないのだから…でもね？御館様、これから近い未来に起こるであろう木の葉崩しだとかを考えるとこんな口の口だよ！

マダラの第四次忍界大戦の布告とか聞いたらどんな顔するんだろうか…。

全人類をマインド・コントロールするぜ！という『月の眼計画』とか…。

「で、だ。ここまで説明したら判ると思うがパパっ之行ってパパっ
と助けてきてくれ」

「はっ？ いやいや、一人で？ ですか？」

益体も無いことを考えてたら、唐突に変なことを言われたので、敬
語が崩れそうになった。

「うむ、というか先も言ったとおり、そしてお前も理解している通
り、七夜は戦場において集団で行動する意味が無い。ならば最高戦
力を此処で出すのが最善手だ。そして現在、この七夜の里に置いて
上忍クラスが三人、他はこの任務を任せるには技量が足りない。そ
してその三人の中で一番の技量があるお前が選ばれるのは必然だろ
う？」

「私、下忍にもなってないですよ・・・」

「そりゃ、お前の母親に言え、こっちは先の大戦やらなにやらで人
手不足だから忍の供給してくれ！ って木の葉からせつつかれてるの
に『うちの子はまだ七夜としては未熟故に』とか言いながらのらり
くらりとかわされ、試験を受けさせねーんだよ！ つーか、本気の
『断頭姫』と殺りあえるのに未熟って舐めてんのか！？ この里の五
本指の上から数えたほうがハエー方に入るぞこらア！？」

ちよつとした地雷を踏んでしまったらしく、冷静で不敵な御館様が
吼えた。ストレス溜まってたノカナー？

テメーエの血は何色ダアアアアと吼える御館様を宥めまし、任務
を受ける旨を伝えて、その場を辞する。

賊の数は50と少し。第三次忍界大戦が終わったところからチラホラと出始めたらしい、忍崩れが頭を張っている一団。数と最低限の忍に対する知識が在れば、下忍もしくは後衛よりの忍では少々荷が重いだらう。ただ、忍崩れとは言った物の、生死が気にされない程度、つまりは血継限界または、一子相伝クラスの術の使い手では、無い可能性が高い。それらは、大抵の場合属国からの追い忍が掛けられる上にビンゴブックに載り賞金首だ。そんな人間が山賊紛いに扮していたら、砂糖に群がる蟻のように追い忍が群れてくる。

それ故に『忍崩れ』と呼ばれるのは、大抵の場合戦場から恐れて逃げ出した下忍を表す。ある程度の術等を継承している可能性の在る、中忍以上の抜け忍は真っ先に追い忍に狩られる。血脈に依存する部分が多く、忍術よりそちらの能力を多用する血継限界持ちより、大多数の里のものが使う汎用上級忍術を習熟する中忍以上の抜け忍が流す術や内部情報の方が問題らしい。だから優先的に狩られる。

そして自分の重要度と自分が置かれる危険度が理解できる血継限界持ちは、そもそも受け入れてもらえる里が少ないので、里から逃げ出す者は少数だ。更に言ってしまうえば、これは七夜にも言える事だが、忍者という普通を逸脱している枠から更にはみ出している血継限界持ちは『何処か狂っている』。

歪なバランスを保つために、『異能』という加重を均衡に保つために、『普通では無くなる』。

それを最小限に抑えるために、能力のON/OFFが出来る様にな

っている場合が殆どらしいがそれでも矢張り歪みは出る。

それ故に、『血継限界』は二者択一を迫られるのだ。

従属か独立か。

泣いた赤鬼という童話が前世で在った、結局はそういう事だ。

どんなに強く恐ろしいモノであっても、自分達を助けてくれるのならば、それは味方で『頼りになる』という事だ。例えそれがマツチポンプのような手法で在ったとしても…。

そして私《七夜 曆》も『正常に狂っている』。

『それでは七ツ夜を越えても、忘れ得ぬ惨劇を始め
よ』

警戒しているのか、廃寺までの道に山賊の風貌をした間抜けが張っているのど踊りかかる。

「えーっと聞いていますか？聞こえていますか？」

「ん、ああ。大丈夫だ、廃寺に雑魚が5名、忍崩れが1名。人質の子は罰当たりにも一番後ろの仏像に括り付けられている。目立った暴行も無し、怪我也無し。十全じゃないか、出来すぎているとも言つて良い」

六度目の惨殺の後、意気揚々と潜入暗殺をしてやろうと思ったら、木の葉の忍に止められた。

居るのは判っていたが、まあ放置して行こうと思ったのだがそれが仇となったのか、凄い長い状況説明をされていたので、此処に来るまでの道中を夢想していたらそれが不服だったようだ。むくれてる。

「出来すぎてる…ですか？」

「この手の山賊崩れは一度討伐したが酷いものだった。女は犯され、男はそれを見せられながら首を絞め殺されていた、結局獣と変わらんのだよ。アレらは。それが手荒な真似をされず済んでいるのは僥倖以外のなんでもないよ？」

私の初舞台は、そんな村の救出だった。殺しも殺した。慈悲もなく殺した。甚振って殺した。

殺して解体して整えて晒してやった。全く持って人を殺した気にもならず、罪悪感なんぞ微塵も感じなかった。家畜を解体する方がまだ罪悪感が沸く。

その目の前の木の葉のクノイチに伝えてやると、顔を青くしていた。

「で、ですが！まだあの子は五歳ですよ？！そりゃ、可愛いですが…」

「同じ男の私が言うのも何だがな、そんなの『どうとでもなるんだよ』、手が在る、口が在る、死んでも構わないってなら小さいも大きいも関係ない、綺麗なモノを汚すだけで心が満たされる、そんな人間も居る」

この成りで『男』と言っても現実感はないが、一度人生を終えたこの身は確かに知っている。

男には、そんなどうしようもない劣情が存在することを…無論女にも在るかも知れないが、幸いなことに今生も、前世も男だ、想像の外ではない。

「まあ忍崩れが居るんだ、万が一の場合人質としての価値が無くなったら意味が無いというのを理解しているんだろっが…」

それにしても二流、三流だ。尾行されているのに気がつかないとは…。所詮その程度の器か…。

ふと尾行という思考に至り気がつく。

「ああ、あんた日向一族か」

「はい：まだまだ未熟者で、常時展開なんて無理ですが…」

特徴的な目に気がつかなかった、というより身長差が在り見上げるのは首が痛くなるので良く見てなかったり…。一瞥してみれば、顔色が悪い。護衛失敗の責任を感じているのかとも思ったがそれだけでは無い様だ。兵糧丸の特徴的な匂いがあるので、無理やりチャクラを維持しているのだろう。

「まあ、サクサク獣退治に行きますか」

「わ、私もいきます！」

行くなどとは言われない、七夜の名前は忍者学校の歴史にもある程度載っているらしいし、先ほどの戦闘も白眼なら良く見えただろう。

「イランよ、これでも『七夜』だ。それにチャクラ切れ寸前の人間を連れて行っても邪魔なだけだ」

「ッ…」

自分の力量を、現状を把握しているのだろう、何かを言いそうにはなったが結局飲み込んだ。

邪魔をすることも、独断専行をすることもないだろう。それを確認して、近場の木の幹を蹴り飛ぶ。

自分に拮抗する相手が母様以外に居ないので今一、自己の力量というのが把握出来ないが、音もなく視認もされず、森を領地とするこの『七夜暗殺術』の習熟度はそれなりに高いと自負できる。

啞然としている木の葉のクノイチに忍び笑いを漏らし、告げる。

『それでは『七夜』を始めよう』

と、そんな風に格好を付けてみても、相手がそれなりに拮抗してくれなければ見栄えもしなかつたり。

「ぎ、ぎとまああああ！」

足の下から、屈辱と恥辱と困惑を押し殺した怒声が聞こえてくる。

「なんだ？この小さな体躯で、完璧に足蹴にされているのがどうしてか判らないか？チャクラを使用しても身動きが取れないのが恐ろしいのか？」

「うっおおおおおっっ」

血と埃で酷い環境の廃寺に、男の怒声が響く。チャクラを捻り出し筋力強化を持ってして私に足蹴にされているこの状況から抜け出そうとしているのだろう。

「無茶無理無謀の三拍子だな。この手合いの制圧術は力では抜け出せんよ」

始点力点作用点と歌いながら、増強された分の力を往なす。

これがある程度、チャクラの性質に習熟した忍なら簡単には行かないのだろうが、結局は山賊風情に身を賣した忍ということだ。

「さて、無駄な努力ご苦労様。知つてのとおり見ての通り貴様の無能な部下も既に冥府に送つた。最後の締めだ、今生の別れだ。貴様のいた世界、貴様が無念を残す世界をよく見届けておくがいい」

「うおっつ！！…はあハツハア、ガ、キが！ガキが調子に乗りやがつて！ざまーねえな！さつさと殺しておけばよかつたな！何が今生の別れだ！！もう良い、金はいらん！その代わり貴様を半殺しにして目の前であのガキを犯してヤル！！なんで助けてくれなかつたの？てな！！そしてボロ屑のように殺してやる！！」

足の下から抜け出した男が口角から泡を飛ばすながら言う。眼は血走り、チャクラは安定せず、怒声をあげる。

「なんだ、逃げ出さないのか。いや、もう遅いが…折角拘束を解いてやったのに…それにあの子の所にいくには私を降さねばならんが？」

私の背後には、件の娘。突入してから、五人の人間が音もなく殺されたのに一切の怯えも見せず、そしてそれは目の前の男と違って虚構でない。それ故に、ちよつとした悪戯心で男の拘束を解いてみたが、こちらを見る眼は変わらない。恐れでもなく、非難でもなく、信頼に満ちた眼。

正直、なんでそんな眼をされるのか判らないが、まあいい。

「ガキがつ舐めるなあああっ」

- 檄

「はあっ何だそれは、猿にも劣る」

術を使うでもなしに、投擲で意識を逸らすでも無しに、チャクラを足に集めての突貫。

速度としては脅威だが、それは普通の人間からしたら、というだけだ。

視認できる程度の速度では、少なくとも私には脅威足りえない、擦れ違い様に『線をなぞる』程度造作も無く終わる。

予想以上の駄目さに初の忍との戦いに若干の失望を覚えながら、鈍い音を立てて崩れ落ちる阿呆の身体や噴出す血の向こうに見える、少女の瞳に困惑する。

人を人とも思わず軽口と共に切り捨てる。

埃まみれの廃寺に、遺体が六対それもやった本人からしてもエゲツない死に様だ。

幾ら人死にが身近な世界だと言えども、幾ら『七夜』に縁があると言っても商家の娘だろうに…

それなのに、どうしてそんなにも
ているのだろ？

嬉しそうな眼をし

渡り鳥の羽ばたき（後書き）

あれですかね。月姫とかタグ入れたほうが良いんじゃないかな。

渡り鳥の眼

如何にも歯切れの悪い幕引きの後、仏像に縛られていた娘の縄を斬り捨て猿轡を外して締め。だと思ったのだが実際の所は衝撃的な一言で、如何にもこうにも為らない状況に差し置かれたのだ。

囚われの少女曰く『兄様』と呼ばれ、抱き着かれた。

簡素にいつてしまえばそれだけだが、縄を切った瞬間に飛び込んできた娘に実は敵の策略！？伏兵！？等と身構えた私はその予想外の一言に思考が凍りついた。

実は先の大戦で死んだ父の隠し子だった！？とか任務で渋々出かけていった母様の再婚相手の娘！？だとか色々邪推しつつ、抱きつく『妹（仮定）』の頭を何故か撫でている自分を理解し、それでも『これが妹の魔力…』等と眩きながらも撫でるのを止めない。それも首が両断された死体が6対在る廃寺で…。

そんなS A N値直葬な光景を、苦笑しながら見ていた日向 木陰が事態を收拾するまで『わけがわからないよ』状態だった。のだが、奪還成功の知らせを商家に持って帰る木陰を見送り、七夜の里で御館様に面会した段階で大体のことが分かった。

商家、と言ってみたが、現代的に言い表せば財閥。名は『遠野』。

そして、助けた娘の名前は『秋葉』

総じて『遠野 秋葉』。黒髪ストレートの可愛い少女だ。まあその母様と同じ風貌なので頭が茹ってしまったが、答えが判れば、何も驚くことは無い。

なんて冷静に言えるはずもなく、ちょっと他の人間には理解できない、催眠術や超スピードなんてちゃっちなモノじゃない尤恐ろしいモノの片鱗を味わってしまった。

御館様の前でポナレフってた私はなんとか再起動すると、改めて自己紹介して更に驚くことになる。

「兄様、どうやら互いの理解に溝がある様なので、改めて自己紹介することに致します。三咲の里の商を取り仕切る『遠野一族』が現当主 遠野槇久が一人娘、遠野秋葉と言います」

そう言いながら正座で頭を下げる姿は、幼い体躯に似合わず堂の入ったモノだった。思わず中に誰か入ってますか？といたくなくなった。

「それと、兄様というのは、兄様のお母様『七夜 月』様の妹が私の母ですので、兄様と勝手に呼んでいますが：駄目でしょうか？」

な、ナンダツテエー！と今度こそ声を上げて驚いた。

結局のところ、廃寺で脳裏を過ぎった幾つかの想像は、当たらずも遠からずと言ったモノだったらしい。私が、秋葉のことを知らなかったのは、母様と秋葉の母は少々仲たがいをしているらしく、絶縁状態に近いものらしい。原因は不明。

「成る程、それでいちいち商家等と遠まわしに言つてたんですね？」

「いや、遠野つて言えばお前がどう思うか判らなかつたというのも在るが、あの時言つた最善手つてのも嘘じゃ無いからな？」

「それに良いタイミングだし、親の仲たがいの溝を子供を使って埋めさせよう」と

「…聡い子供は嫌いだ…」

拗ねる御館様に『万が一があるので、『七夜』から背後関係を一応洗う為に人手が動員される事になった。そしてそれが落ち着くまで秋葉嬢は、お前が預かること。使用人が明日にでも荷物を持って、手伝いに来るらしいから食事などは心配するな』と半ば投げやりな御館様宅を追い出された。

その後、少々ギクシャクしながらも、というより私だけがギクシャクしながらも一日を終えた。

内心懸念していた、事件に対する恐怖感や嫌悪感などどこ吹く風、無理をしているようにも見えなかつた。

そして遠野本邸から、お手伝いさんを受け入れて三日目

「兄様、食事はキッチンと摂らないといけません」

「兄様、寝癖が付いていますよ？もう、確りしてください」

「兄様、一緒にお茶は如何ですか？」

どうしてこうなった…。

お手伝いさんは割烹着の悪魔でもドジっ子メイドでも無い普通の人だった。

「兄様、どうかしましたか？」

「ああ、今行くよ、秋葉」

色々考えることは増えたが、結局は大事な『家族』が増えた、唯それだけの事だろう…。

渡り鳥の眼（後書き）

ちよい短め。

割烹着の悪魔とか・・・出すのか？出るのか？

渡り鳥の懸念

秋葉を我が家で預かって、一週間これまでの溝を埋めるかのように色々な事を話、色々なこととして思い出を作った。しかし、それはこの日までの準備期間でしかなく、儚い幻想だったのかもしれない。

母様、任務からご帰還。予定では後一週間は在った筈なのだが…多分御館様の手筈だろう。交代要員も送られてきたらしいので…。

「……………」

日本風家屋の我が家の居間は、今、張り詰めております。…なんて言ったらちよつと致命的な致命傷になりそうです。

「あ……………えつと…」

声を出してみると母様と秋葉の視線が集まるのは、必然。だが、この居た堪れない空気をどうかしないと…『家族』なのだから、仲違いもするだろう。それでも最終的には許せるのだ、大抵のことは許せるのだ、それが『家族』なのだから…。

「母様、知っているのかは、判りませんがこの子が『遠野 秋葉』です。私には、母様がどんな気持ちなのか、何故秋葉の母様と仲違いをしているのかは、判りません。ですが、私は秋葉と出会え、兄様と呼ばれる事が…嬉しいです…」

そう、困惑は在った。名前だとか、振る舞いだとか、この世界の事だとか。でもそんなものは全てどうでも良いことだと気がついた。『私は此処にいる』ただそれだけの事だ。知っていることは便利に利用しよう。そして知らないことを楽しもう。でなければ『生きていく意味がない』。

「そう…ですね。はい。嬉しかったです。兄様と呼ばれると頬が緩んでしまいます。だから…それでは駄目でしょうか？私も、私たちも気にしなければならぬでしょうか？」

嬉しかった。『家族』が増えたのだ嬉しくないはずがない。母親同士が仲違いをしているのは仕方がない、大人には大人の事情がある。だけど『子供である自分には関係がない』。そんな狡い気持ちを、自分の年齢をたてに言ってみる。

「はあ…貴方は狡い子ね…子供に、自分の愛する子にそんな顔して、そんな事を言われたらどうにも出来ないじゃない」

「母様…」

悲しい顔をさせるかとも思ったが、母様の顔に浮かぶのは苦笑だけだった。

その後は、何とかというより、打って変わってと表すほうが近い変わりようだった。

特に母様の変わりようは結構なもので、ぎくしゃくと自己紹介と挨拶をする秋葉に対して、大人の事情に付き合わせていた事への謝罪から入り、何故仲違いをしているのかという説明を終えると、一緒に風呂に旅立った。裸の付き合いらしい。

「どうぞ」 「ああ、ありがとうございます」

母様のお土産の温泉饅頭を茶請けに、派遣されてきたお手伝いの楓さんが淹れてくれた熱い緑茶を飲む。この世界は妙なことも多いし、文明自体もチグハグな印象が在るが、そんなのを凌駕するほど日本食と同じものが食べられる事に感謝だ。

「その、ありがとうございます」

「はえ？どうかしましたか？」

熱すぎず温過ぎずという完璧な緑茶と、餅つとしている癖に甘すぎない饅頭に舌鼓を打っていると楓さんから急にお礼を言われたので、ちよつと変な対応になってしまった…恥ずかしい。

「秋葉さまの事です、秋葉さまはとても曆さまにお会いするのを楽しみにしておられました、夕陽様と月様が仲違いをされているので、その…曆様に嫌われているのでは、っと思つてらっしゃいました。それもこの数日で払拭されたと思いますが、矢張り言葉に出して頂けるとまた格別だと思えます」

「はあ…といつても恥ずかしい話、母様から聞いていなかったの、嫌う嫌わない以前の問題だったんですが、それに一人っ子だから、妹みたいで嬉しいですよ？多分どんな話を聞いてても、それは変わ

らないでしょうし」

それでも、ありがとうございます。と頭を下げる楓さんに苦笑しながら『気にしないで良い』と答える。この数日の秋葉と楓さんの生活と今日の母様の話で幾つか判った事に思考をやる。

まず、『遠野』について。

そもそも、『月姫』の世界観が混ざっているのは多分自分が原因だと云うのは理解が出来る。そんな世界が最初から在ったのか、それとも私という存在が因果として作り出したのか…だが所詮鶏が先か、卵が先か、だ此処に今居る以上どうでもいい。だが、『月姫』という世界観の因果を含んでいるなら『遠野一族』による『七夜の里襲撃事件』この首謀者である遠野槇久の存在。これは不味い。

ただ、『月姫』では『人と鬼』の『混血』で在るから『退魔組織』である『七夜』と敵対したが、此処では違うらしい。

それと云うのも、『遠野一族』は元々忍の一族であり、それも血継限界を有する一族『だった』。だが住んでいた里の住民との隔絶や一族の血継限界の発現が減って行き、このままでは『遠野一族』自体が存亡の危機にさらされる！という事で、忍である事を辞め、商家に成ったらしい。まじ英断。

まあつまりは、『混血』と云うより『忍混じり』だろうか？

これが母様と秋葉の母様である夕陽さんの確執を生むことになるのだが…。

姉妹でありながら『七夜の体現』とも評される母様と、『七夜』にしては身体が弱かった夕陽さんは子供のころは仲が良かったらしい。

寝込むことが多かった夕陽さんが大切だったのだ。そう優しい顔で母様は言っていた。

ただ、まあ何処にでもよくある話、一人の男に二人が好いたのが悲劇？喜劇の始まり。

骨肉の争いを、『この泥棒猫！』みたいな争いが、ある訳も無く。ズルズルと微妙な関係が続き、ある日、夕陽さんは遠野家に嫁いでいった。真意を問いただす事も出来ずに、複雑な感情で妹の式を眺め、その数日後に渦中の男からプロポーズを受けたのだ。

曰く『ずっと好きだった、好きだったが決意が付かなかった、だが先日の、君の妹さんの式のときに、妹さんに背中を押されて…』

まあ、なんというリア充なんでしょうか、俺は全く関係ないぜベイビー、と言わんばかりの男の発言、

男は、示していた筈の姉妹の好意に気が付いていなかったのです！

それが我が父…と戦慄しそうになったが違うらしい。

『独りよがりで勝手かもしれないけれども、人の気持ちを探る事が出来ない人と幸せにはなれません、少なくともあの子が、夕陽がその人の事を好きだったのは事実。それをよりにも寄って…ッ！』

鬼の形相でした…首撥ねの死体を見ても怯えない秋葉が怯えるレベル、マジパネエ。

その男に少し灸を末、そしてどうしてこんな事に、一番大事なものは決まっていた筈なのに…と後悔し、それでも嫁いで行った夕陽さんにどう顔を合わせれば良いのか…と言うのがズルズルと…。

が、現状であり、私に言わなかったのは、『恥ずかしかった』からだそうだ。

まあね、『結局、その思い悩んでいたのを支えてくれた男が貴方の父よ』だもんねえ。

ドコノラブコメですか。

『遠野』というのに忌避感を母様が抱いていたのは、『血継限界』の駒、政略結婚の様相が在るのでは？と、自分から身を引くためにその話に乗ったのでは？と云うことだ。

実際のところは、判らないが少なくとも夕陽さんは『七夜』としては大成できなかったが、チャクラ量は豊富であつたらしい。

ただ、幸せそうで良かったと秋葉の頭を撫でる母様の顔は優しくかった。その眼差しの向こうには今だ大事な妹を見ていたのだろうか…。

これを期に姉妹の溝も埋まるだろう。そう思わせる眼差しだった。

次に『七夜滅亡の危機』、これは微妙。そもそも『月姫』の『遠野』でない以上推測の域も出ないし、言ってみればというより、親戚だ。疑う時点で馬鹿馬鹿しい。それも『原作知識』なる自分独りしか持つて居ない空想の産物で、だ。

確かに受け取った力の幾つかは『型月』由来だが、それが理由であるなら他の能力とか：尤、最、ヤバイ物が来る。

この世界の寿命がマツハで即死だ。まあ『型月』世界観もちょっと常識外だが。

「あの、どうかしましたか？顔色が悪いですが…」

「うえ？あ、ああちょっと今日は夢見が悪くて、それを思い出ししてしまいました」

どうやら深く考えこみ過ぎたようだ、心配をさせてしまった。

悪いほうに悪いほうに考えても仕方がない。どれもこれも未確定なのだ。少しの違いで悲劇が起こらない可能性が高い。それだけをただ喜ぼう。

渡り鳥の懸念（後書き）

ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うが＝なぐる
ふたぐん

渡り鳥の驚愕

「はっ？忍者学校…ですか？」

「ああ、木の葉隠れの忍者学校、行ってみないだろうか？」

三咲の里の遠野屋敷で槇久さんを相手に紅茶を飲んでみると、脈絡もなくそう切り出された。

七夜の里からそう遠くない、寧ろ近い距離にあるこの屋敷には、よく来るといふより週一で来たりする。尤多いかもしれない…。

秋葉の誘拐事件を契機に、母様と一緒にこちらの屋敷に出向き、話し合い、涙を流しあい、母様と夕陽さんは仲直りをした。したのは良いのだが、『大事に思っていた』のは母様だけではなく夕陽さんも同程度に母様の事が好きだったのだ。つまり、積年の鬱憤を晴らすかのように仲の良い姉妹になったので週一に必ずどちらかが互いの家に出向く程だ。ちよつと姦しい…。

それはそうとして、忍者学校だ。

「えーつとそれは槇久さんの個人的な案でしょうか？それとも『七夜』と『遠野』の？」

「恥ずかしげもなく言ってしまうえば両方、といった事かな？」

つまり、『七夜』には話しは通してあるという事なのだろうか？では、何故？

「嗚呼、そうだな、ちょっとこれでは簡素すぎる説明になっているな。うむ、改めてちゃんと説明しようか」

隠すことなく疑問を顔に出したこちらの思考をよく読み取り、槇久さんは説明をしてくれる。

正直な所、『この世界はこの世界』と割り切った心算では在ったが矢張り、相対するまで確定は出せなかった。だが、少なくともこの目の前に居る『遠野 槇久』は『七夜』に敵対することはないだろう。

今では、そう思っている。

何処か、この人と私は似通っているのだ。

思考を纏めながら、こちらにキチンと説明しようとする彼の姿を見ながら、そう思う。

纏めてしまえば、私が木の葉隠れの忍者学校に行く理由は三つらしい。

そもそもの『忍者の不足』。これは数年前に終わった第三次忍界大戦の煽りも在るが、何時の間にか終わっていた『木の葉隠れの里、九尾襲来事件』が止めとなったらしい。ぶっちゃけ知らなかった。と言うのも多分その頃は、まだ自我が安定しなかった時代だろう。それはさて置き、『九尾襲来』これは正直致命的と言っても良いダメージを木の葉に与えたらしい。

まあそれはそうだろう、何と言っても代替わりした直後の『火影』

が死亡。足止めをするために多くの忍がその命を落としたらしく、人員不足も甚だしい。それで仕方なく、再就任した『三代目火影』の指揮の元、忍者学校自体が崩壊した煽りもあり、卒業繰上げなどの手法で誤魔化しはしたらしい。

だが、結局の所、質の低下と人数不足は完璧には解消される事は無い。人は畑から産まれる訳ではないのだから。

それで目を付けたのが、『七夜』らしい。里自体が『暗殺術』の継承する一族の群れだ、目を付けないのが可笑しいだろう。まあ、それでここ一年程は母様も仕事が忙しそうでは在る。里自体もだ。

だが、そもそも『七夜』がちゃんとした木の葉隠れの一族に組み込まれていないのは、その戦闘技法の奇特性と『木の葉隠れに既に存在する暗部』との折衝を避けるためだ。誇るでもなく驕るでもなく、『七夜』の暗殺術に『暗部』では勝てない。

構造が違うのだ。産まれたときから、『七夜』として育てられる人間と、『暗部』に所属する人間とでは…。

『七夜』は殺すために殺す。任務のため、誰のため等と言わずとも殺せる。

それが『七夜』の異常性の一つ、殺人に対する忌避観の欠如だ。

それ故に、『七夜』は木の葉隠れに籍を置くだけで、仕事を請け負うだけで、政治にも、統治にも口を挟むこと無い。自分たちの在り方を知っているから。

そして木の葉自体も、幾つかの名家との懸念もあり、自分から席を辞した『七夜』に少々の負い目が在る。らしい。どうやら思った以

上に『七夜』は歴史ある里なのだ。

しかし、事はそうも言っていないらなくなった。『第三次忍界大戦』
『九尾襲来』それに付け加え、一年前に『日向家』の一人娘が誘拐
されたらしい。…こちらの知らないうちに、物語はどんどん進んで
いるラシイネー。主人公に取って代わるぜ！という訳ではないので
楽でいい。

それは、そうとして名家の跡取りが狙われる程の杜撰さ、忍とは思
えない手緩さに一部の人間が、在る意味『忍の極地』とも謂える『
暗殺術』を使う『七夜』を里に呼び込むことで、意識改革を促した
という側面が一つ。

二つ目は、『七夜』と『遠野』両家の懸念だ。

人員の損失、それ自体は理解できる程度であつたが、結局のところ
蚊帳の外、対岸の火事。

商売人として既に立場を他国にも確立している『遠野』と実力を持
つてして独立できる『七夜』、そもそも両者が結びついている時点
で磐石であり、大人数を抱擁している訳でもない『七夜』程度の人
数なら『遠野』が支援し続ける事は可能らしい。

だが、『火の国の』という看板が無くなると両者共に『面倒になる』
。その程度の懸念ではあるが、生き残るために『忍』を捨てた『遠
野』、恨みから逃げる為に中央政治から離縁した『七夜』。両者共
に亡国という大事は避けたい、でも『七夜』も『遠野』も中央に正
直余り関わりたくない。

じゃあ、分家を作っちゃえっと、人員の貸し出しという体裁より、
『本家扱いの分家』で家を中央に興してしまえと、何かあっても最

最終的に『七夜の里』の独立という切り札が在れば、向こうも無茶は出来ない筈。という高度な政治判断らしい。因みに向こうの言い分を全部飲むと『七夜の里』は廃止。木の葉隠れの里に居を構える事になる。

ちよつと在り得ない。『七夜の里』は周囲を森で囲み、幻術で封じている一種の結界領域だ。

そこからノコノコ出て行くのはどう考えても在り得ない。

だが、断ること自体は簡単だが、現在の立ち位置より外れると内憂扱いで敵対されかねない。それ程切羽詰っている様子なので、『七夜の断頭姫』と『七夜の赤鬼』の息子で在り、既に完成された『七夜』で在るとも謂える私が分家を起こすことで、場を濁す。

「えつとそれって、何かあったら切り捨てられませんか？」

「それはないよ、言葉で言っても信用できないと思うから、もし受けてくれるのならばそれ相応の証明の仕方は考えているから」

そもそも、そんな事をすれば僕が妻と、君の母に斬り捨てられるよ……。序に娘にも……。と顔を引き攣らせる槇久さんの言葉に納得する。『七夜』と『遠野』の尻尾になるかと思っただが、確かにないだろう。

というか、そんなことになったら。御館様の家を襲撃する。

「怖い顔になっているよ……」

そして、最後。これは槇久さん個人の思惑。

「知っているとと思うが秋葉はね。血継限界に覚醒している、それも先祖返りと言ってもいい程だ。私個人としても親としても、それは嬉しい。こんな時代だ、力を持つのは悪いことではない」

そう、薄れ殆ど力を失った筈の血継限界に秋葉は覚醒している。そしてそれを意のままに操る。

それは何時か感じた違和感だった。

「だが、『遠野一族』の当主としては認められない。我々に不相応な力はない。それも一代限りの先祖返りなんて…無闇に振るうべきではない…勘違いをしてしまう…」

苦惱、哀切、それらが声に乗せて伝わってくる。

「だから、私は秋葉を木の葉にやろうと思う。その手助けをして貰いたい…」

秋葉の、娘の幸せの為に…。そう頭を下げる槇久さんとはとても、カツコよかった。

こんなカツコ良く頭を下げられると、こんなに誇らしげに頭を下げられると、羨ましくて答えなんて決まってしまう。狡い、と思いつつも頭を上げない槇久さんに答えを告げる。

渡り鳥の驚愕（後書き）

時代考証は一応しているけど、相違があるかもしれないっ

大体ナルトの時代変遷はワカリニクイ！

渡り鳥の策謀

「……………」

七夜 暦改め両儀 暦ですが、会議室の空気が最悪です。

唐突に槇久さんから、『木の葉隠れの忍者学校』に入学しないかと打診されて一ヶ月。既に根回しというより後は、私の意志次第という段階だったようで返事をした次の日には、用意が始まりました。

御館様は数年前から既に木の葉から打診されていたのをのりりくらしとかわしてきたので、やっと問題が片付くと精力的に動き回り。そもそもの下忍にもなっていなかった原因である、母様の過保護は『秋葉ちゃんの為ならしかたありませんね…』と寂しそうに呟くだけで済んだ。それはそれで堪えた。が何時かは、飛び立つのだあ！と奮起することにした。正直この様な、寂寥感は味わいたくなかったがそれとは別に母様の愛情を感じ何だか暖かい気分になれた。

まあ唯、御館様と槇久さんそれと母様と夕陽さんの話し合いは少々奮闘したらしい…。

主に、母様と夕陽さんの手腕が発揮されたようだが…。

そんなこんなで、『七夜』一族と『遠野』本家と分家の党首陣を集めた会議での現状の確認、これからの方針、私が興す『両儀』一族の扱い。それを纏めて発表し、各位共に意識を共有し合い本格的に動き始めた。

少々の不服でも起きるだろうか？と覚悟を決めてはいたのだが、あっさり満場一致。

肩透かしを食らった気分だったが、『七夜』に関してはそもそも政治色の強い中央に関わりたくない人間が居らず、寧ろ私を贄にしたようで気分が悪いのだが、これも里の為…ということらしい。

『遠野』に関しては、秋葉の事もある上に何より、どれ位の規模、期間になるかは判らないが私が興す『両儀』とも付き合いが増えるのだ。起きた問題を解決しながら、利も得る。と槇久さんの根回しが済んでいただけの話。これからはそう言うことも考えねばナラヌノカーと肩を落としながら、挨拶回りに気合を入れると、御館様と槇久さんに『ようこそ、こちら側に』と言われた。

なんだろう、この速まった気分は…。

そんな感じで、気合を入れたり、やる気を落とされたりしながら、一ヶ月でサクサク進み、木の葉の『両儀』私有地に移住し、初めての会合。それが現状なのだが…。

「……………」 「……………」 「……………」 「……………」 「……………」 「……………」

なんとというアウエー感。多種多様な視線が集まってやがるぜ。

威圧・嘲笑・侮蔑・憐憫・困惑・期待・憤り、最後の憤りは自分？木の葉？に対してかこちら向きではない、日向の当主は大変ですな！。

しかし、自分たちから打診してきたのにこの扱い。一本柱ではないのは、原作知識と御館様と榎久さんからの知識で知ってはいたが、恐ろしいね。特にうちはフガク、志村 ダンゾウの感情が一番強い。今にも斬りかかってきそうだ。

火の国大名、及びご意見番と三代目火影の決が入っている以上、既に決定事項。

この場合は、同意を求める場ではなく、新興の『両儀』を周知する為の場だ。その腹の中は煮えくり返っているだろうさ。特にクーデターを起こす筈のうちは一族は…。

「遅くなってスマヌな。それでは、会議と言うより紹介を始めようかの」

そんな事を、考えていると遅れたと言いながらも時間通りに来た三代目火影が会議の始まりを告げる。

「うだあ〜うあ〜」

卓袱台の上でダレる。あの絶妙な空気の間から開放され、やっと新居たるこの家に戻ってこれたのだから、これ位許せ。と今は居ない秋葉に言い訳する。

「曆様、お茶をどうぞ」

「ありがとうございます」「翡翠ちゃん」「翡翠っとお呼びください」

考えとく〜と返事をする、少し困った風な顔で場を辞す彼女の後姿を楽しむ。

彼女の名前は、翡翠。姿も翡翠。初めてあつたのは、秋葉を送り返した時だったが、その時の『取り合えず楨久殺つとくか』な気分は新鮮だった。

まあ少々の誤解であると、色々話している内に理解したが、ちよつと危なかった。

その縁もあり、秋葉が此処に来ることもあり、彼女『たち』もこちらに來た。忍者学校に入る事はないが…。

そう彼女『たち』なのだ。割烹着の悪魔のあの方…も居る…

ちよつと苦手。

現実逃避は辞めて考える、これからのことを。この中も未来も含めば外も敵だらけのこの里でどうやって秋葉を翡翠ちゃんを琥珀さんを守りながら『両儀』を作るかを…。

会議での印象と知識を刷り合わせる。

うちは一族は、格別に敵だ。志村 ダンゾウ一派も潜在的な敵になるかもしれない。

日向一族は、外に目を向ける余裕は無いだろう。

猪鹿蝶の一族は、好意的。既に領分が在り、客観的に判断が出来るのも大きいだろうが、そもそも権力志向は無さそう。

油女、犬塚一族は同情的。というか、油女シビは寡黙過ぎて感覚的にしか判らなかった。

その他の一族も居たが、少なくとも『私個人』については懐疑的だが、『三代目火影』の決定ならという流れだ。

警戒するべきはダンゾウ一派、か。

うちは一族自体は、脅威だが『うちは一族滅亡』の引き金を弾いたのはダンゾウの思惑。

しかもダンゾウは『根』の指導者である故に、『暗部』に勢力図を持つているのは想像に容易い。

この勢力を広げるには丁度良い騒乱の中、『暗部』に匹敵する『七夜』は目上のたんこぶだろう。

「面倒だ…、今なら『七夜』の祖が木の葉隠れから抜けた理由がわかる…」

面倒だ、殺してしまうか？という思考がチラつく。多分それが『嫌』ではなく『面倒』だったのだろう

ダンゾウ自身を殺すのも、暗部を壊滅させるのも、無理ではない。少なくとも私単体の戦力で言えば、『被害を考えない』のならば可能だ。里ごと吹き飛ばしてしまえば良い。首を順に狩っても良い。

だが、考えなしに狩ってしまえば獣と変わらない。人は望むとも望まぬとも、人の中でしか生きていけないのだ。

それが判っているから、それが判ったから、煩雑な政治から遠のいたのだろう。

例え、『七夜』という名が軽く見られたとしても…

そもそも、『名』に執着するほど、『七夜』は清浄さを自分たちに求めている。

「嗚呼、面倒だ…」

「曆様…、私が、私たちが居ます。なんのお役に立てるか判りませんが、お傍に居ます」

茶を注ぎに来た、翡翠ちゃんに小さく呟いた言葉が聞こえていたらしい。

表情はあまり見せないが、真摯な声にささくれた気分が少し癒える。

「ありがとう…取りあえずは、秋葉の報告待ち、かな？考えるのはそれからしよっと」

『家族』を守るだけではなく、『家族』に守られているのを忘れていたらしい。

『力』とは恐ろしいものだ…。なんでも自分でしてしまおうと思っ
てしまう。

そう思いながら戒めながら、美味しい美味しい茶を楽しむのだ。

何処でも変わらぬ『家族』の暖かさを感じながら。

と、お洒落に締めくくれたら良かったのだが…。

「なんなんですかねえ？秋葉さん…コレって…」

「私に言わないでください」

そんな酷い！と思いつつも、そりゃそうだと納得する。
面倒な会合から帰ってきてそうそうに、お茶をしていた私たちを見
て仲間はずれにされたと思ったのか不機嫌になった秋葉を撫で宥め、
受け取った冊子にげんなりしながら再び目を通す。

薄い冊子程度の内容には、木の葉の里の経済状況、及び輸入物資の搬入ルート、その信用性。 e t c、 e t c
最初のほうは、里の外で直接やり取りすれば怪しまれるでも商人の内では当たり前前の情報から、段々と深度は深まり里の外でやり取りすれば謀反の疑いあり！な情報から、これ一冊で木の葉を壊せるぜ！な情報までが正確に要点を纏めて書かれている。

「取り合えず、あれだね。琥珀さん火貸して」

汚物は消毒だ〜〜と言わんばかりに焼却。この日のために受けた一ヶ月の授業で私が理解して暗記して燃やしたのだと判っている三人は何も言わない。

「知らぬのは、本人ばかりっか」

遠野一族の暗号で記載されていた内容には、『うちは一族謀反の疑い有り』の一文

渡り鳥の策謀（後書き）

何だかんだ言いながら、何時の間にか好感度マックスなのがオリ主ですよ。

渡り鳥の爪

さて、唐突だが、私は忍者だ、この『木の葉隠れの里』の中枢も忍者だ。主義主張、能力の高低はあれどもチャクラというエネルギーを操り、常人では考えられない現象を引き起こす。それがこの世界で言う忍者。だが、それは上辺であり正確ではない。忍に求められている物は軍事力であり、軍人としての防衛力であり、兵器としての攻撃力だ。忍者と戦うための忍者。そう考えて良いだろう。

そう軍人なのだ。国を守るべき。

「えーっとこれは、うん、どうすればいいんだ？」

「報告してきた人間も、持て余していたそうですよ」

そりゃそうだ、と秋葉に同意する。何せ軍人が国の実質的なTOPだ。それに所属する軍人が謀反する。クーデターと言ってしまえば簡単だが、傍から見ればテロに過ぎない。理性的な面言えば、幾つモノ事件でズスタなこの状況で身内がテロ？ふざけるな。だろ

う。
「とは言っても、確固たる証拠は無いようですけどね〜ですのでこの様な形での報告らしいですよ？」

琥珀さんの楽しそうな発言にも同意だ。ぶっちゃけ前知識として知らなかったら、アホか？と思う。

報告する方に廻ったとしてもどう報告するか頭を抱える。

「ああ…だから今、私に、この段階でつとと言うことか…」

「貧乏くじひいてしまいましたねっ」

うふふふふと楽しそうに笑う琥珀さん、多分、彼女は実際に起きると思っっているのだろう。

私とは違う、商家としての遠野、忍としての七夜どちらでもなく、客観的な判断に基づいてだ。楽しそうなのは、私が驚いているから、どんな判断を下すのか楽しみだからだろう。

しかし、琥珀さんとの理解には少しばかりの溝がある。何せ、知っているのだ、私は『うちは一族』がクーデターを計画している事を、そしてそれが失敗するであろうことも…。

ただ驚いているのは、

情報統制位きっちりやろうぜ

要するに、商人に察する事が出来るレベルで違和感があると言うことなのだろう。ぶっちゃけ失敗は確定だ。そこで違和感を感じる。その違和感を思考しながら取り合えずの指示をだす。

「この情報は秘匿。下手に告発しようものなら、こちらが槍玉にあげられるのは確定。この大事に輪を乱すのが目的か！と、そもそも信頼度が違うのだから、証拠が、いや証拠が在っても無理だな…。それに間抜けには間抜けの結末が『用意』されている筈だ」

判断を保留している秋葉は、驚き。琥珀さんの笑顔は深まる。こうその出来の良い生徒を見る暖かい目は居た堪れない…。カンニングしてるんだよ？と言いたくなる。

「では、兄様は起こると御思いなんですか？」

「十中八九程度には、そして失敗するかな」

それは、何故？と既に起きるといふ事を確信した目で問う秋葉の信頼が痛い…。先ほどから満面の笑みでこちらを伺う琥珀さんの期待にも報いる為に、知識を情報で精査し補完する。

「簡単な話。うちの成り立ち、この里で置かれている状況、現在の火影の出生。現在のこの里の状況」

これだけで理解の色を示す秋葉は、上に立つ人間として既に能力を持っているのだろう。琥珀さんはご満悦、合格点のようだ。そんな二人の反応に満足し、詳しい説明は必要ないかな？と思い、茶を静々と淹れてくれる翡翠に感謝しながら、秋葉たちのお土産を頂く。秋葉は少し考えることが、と早々に部屋に戻っていった。

お夕飯の用意をしますね。と出て行った琥珀さんを見送りながら考えるのは、先程感じた違和感の事だ。

流れが、有利すぎる。所詮この世は流動する世界だ、私の知識は蛇足に過ぎないが、不必要ではない寧ろ優位に立てる物だ。未来は変わる変えるとしても来るはずの未来を知っているのでは大きく違う。しかし、私を感じている違和感はそこではない、自分の優位性など考えなくとも理解している。

うちはマダラに優位な流れだ。そう思い至る。

前世では所詮娯楽の一つでしかなかったので深く考えた事は無かったのだが、今の立ち位置から身を入れて考え、世界を肌で感じる。

うちはマダラに優位な流れ、それが出来ている。偶々なのか、関与しているのか…。

幾つかの思考が浮かび、消えていく。うちはマダラに取って『西儀』は障害になりえるのか、どうか。

こちらから敵対するのは確実だ。寧ろ早々に殺すべきだ。ある程度の事件を利用して立場を補強する考えは在るが戦争なんて面倒なこととしない。強者との殺し合いに愉悦したとしても、雑魚を殺すのに愉悦を覚えることは無い。そんな無駄な殺しより『家族』に降りかかる火の粉の方が心配だ。命は平等ではないのだから。

嗚呼、思考が反れた。うちはマダラだ。私と相對するのならば全能を持ってして極彩と散らそう。

向こうがこちらを脅威と思い、絡め手を繰るのならば…どうするべきか…一応準備はするべきか？

いざとなつて準備が出来ていません、待つてください何ぞ敵の前で言える訳も無い。ならば後悔をしないために動くべきだろう。

「翡翠ちゃん、少し出てくる。夕飯までには戻るので心配しないで良いよ」

用意するものを脳内でリストアップしながら、翡翠に見送られ里に出る。

待っているが良い、暗殺者は暗殺者らしく正々堂々真っ向から不意撃つてやるう。忍という盤もひっくり返してな…。

「ありがとうございました」

何件目かの買い物が終わらせ、店から出る。

遠野に関する店は、事前知識で網羅しているので今日はそれ以外の店を梯子することに決めてから数時間。朝早くから面倒ごとばかりだが、既に3時を廻っている。早めの昼食を済ませて会合に出たので、少しばかり空腹だ…。

どうにも一応の信頼はされているようで、屋敷にもこうして歩き回っている私にも監視の目は付いていないので、何処へなりとでも行けるのだが、余り妙な店に入って後から秋葉にバレると不味い。

秋葉はそういう所は厳しいのだ、立ち食い蕎麦なんて食べた日には…。

きゅるる〜

空腹は最大の調味料らしい。

「むう…どうするか」

コンビニなんていう便利なモノがある訳も無く、…無いよな？

「あれでいいか」

少し先にあるのは、たい焼き屋の暖簾。その傍に在る駄菓子屋で飲み物を買えば良いだろう。

「それで…どうしてこうなったのですか…?」

「あらら〜可愛い猫ちゃんですね」

「可愛いです」

三者三様の反応。まあ、何とというか。

「可愛いだろう?」

「ニニ」

渡り鳥の爪（後書き）

原作では何処まで関わっているか言及してませんよね。

と、言うか言ってる事が二転三転してるのでマダラの胡散臭さは天
元突破ですわー。

渡り鳥の日常

パチン パチン パチン

木と木が打ち合う軽い音が場に響く。

パチン パチン パチン

「ふむ…」 「待ったはナシだぜ」

盤の向こうの相手が言う。髪を後ろで詰め纏めて、気だるげな雰囲気だが盤を見る目の奥には目まぐるしく動く感情の波。駒の優劣、戦況を一時的にはなく、打ち手から予測しているのだろう。

戦況はこちらに不利。ううむ手強い、「ニー」ああ、すまない。抗議の声に、止めていた手を動かす。

パチン

「うち」「お前は少々口が悪くないか？」 「気が付かなかったら勝てたと思うと、な」

パチン

指し手は、IQ200を誇る奈良 シカマル。相対するは、能力補正で限定的な未来予知まで演算を可能にする私。こう表してみると自分の馬鹿げた性能に飽きれもするが、実際の所は何事も使いどころと言った所か、少なくとも『将棋』に関して言えば五分。因みに、琥珀さんとも打ったが普通に負けた…。

こちらの里に住み始めて数日、慌しい日々も一応の収束を向かえ大きなイベントは数ヶ月後の忍者学校の入学式だけ、という我が家に来訪者が現れた。

奈良一族、山中一族、秋道一族の男親と息子娘の六人だ。何事か？と思ったが、同期に入学することになったので挨拶と親交をと言ったところらしい。

問題もなく、それなりに三者三様に通じる所もあり交流が深まると、互いの家を行き来するようになるのにそう時間は掛からなかった。

いのは、何やらこちらでは珍しい完全洋風建築の『両儀』の屋敷に興味津々で秋葉や琥珀さん、それに翡翠とも仲が良い。一番我が家に来るのは、いのだろう。琥珀さんと何やら密談している姿を見かけるのは忘れない…！

チョウジとも結構仲が良かったりする。ポテチとか秋葉に秘密で融通して貰ったり…！

琥珀さんのおやつや、買ってくる銘菓的なお菓子は美味しいんだけどねえ。ジャンクフード的な味は欠かせません。だが私には最終防衛妹ラインが存在するのだ…。それ故にチョウジは神。チョウジはチョウジで『遠野』の系列で送られてくる銘菓に御垂涎、持ちつ持たれずだ。

そして、意外と言うより他がないのが、面倒くさがりだと思っていた奈良 シカマル。実際会っても面倒くさがりなのだが、コイツと一番仲が良かったり。シカマルが一人で我が家に遊びに来たときは、少し驚いた。

いのやチョウジは今一、『忍者』というのを深く考えた事が無いよ

うで、そちらの方面では少々の溝があるらしい。

旧家、名家とまでは及ばずとも、猪鹿蝶のご威光はそれなりに面倒な重荷らしい。

そして、シカマルにはそれを理解できるだけの知力があり、またそれに周囲の人間は期待する。

期待されるのは面映いがどうしようもなく、不安でもあるらしい。自分にそこまでの能力は無いと断じているのだから、尚更だ。

自己評価が低いなー。と思わないでもない。

それ故に、『両儀』という家を自分より年上とはいえ、僅か2歳しか変わらない私が背負うのに色々思うこともあるらしく、良く遊びに来る。

十全に答えられる事ばかりではないし、少なくとも私は最低限私にどんな能力があるかを把握している、何せその知っている能力は後付なのだ。だから、どれ程シカマルの悩みに答えられているか判らないがそれなりに答えられているのだろう。秋葉に『シカマルさんにご執心のように』と剥れられる位には、行き来する。

それは友達というには違うかもしれないが、少なくとも私はこの面倒くさがり屋な癖に周りを大事にしたいと思って悩んでいるシカマルの助けに成れば良いのだが…。

「なんだよ…その生暖かい目は」

「いやいや、ツンデレだな」と

顔を引き攣らせているシカマルを笑いながら、膝の上のレンを撫で

る。

拾った当初は、少々汚れていたが今では夜の色と表しても良い黒々した毛並みは、上質なビロードのようで凄まじい感触だ。気持ちよさそうに撫でられているが撫でているこちらにも気持ち良い。

最初は少し反対気味だった秋葉も陥落せしえた撫で触り。

尤も私以外に余り触らせないのだが、そこもまた可愛い。タイヤキ一匹で釣ってしまったこの子。

帰る道も着いてくるので、首輪もしてなさそうな野良だったので、飼うことにしたが本当に飼い主は居なかったのだろうか？思わずレシとも名づけたが…。

パチン 「むっ」「待ったは、ナシだ」

レンの撫で触りに没頭していたら、シカマルに追い詰められた。得意げに口上を述べるその顔には少々の愉悦、先のツンデレ発言の仕返しか…。これでは後12手で王手だ。さてどうするか…。

「しかし、早いもので来週には入学式かぁ」「面倒くせえ…」

お前はそればかりだなぁシカマル。「ニー」

私の心境に、同意するかのようにレンが一声鳴く。

堪えられない感情が密かなざわめきとなって静々と、それでいて確
実なざわめきとなって場を乱す。

青々とした空の下、木の葉隠れ忍アカテミ者学校の見える広場で入学式が執
り行われている。

ある者はこれからに期待を持って余し、ある者は未来に思いを馳せ、
ある者は栄光の踏み台に。

そんな様々な感情が、入学する子供たちではなく、参列する入学生
の両親や上忍などから多く感じられる。そして等量の視線も。

「面倒くせえ……」

「すまん」

そんな空気を感じてシカマルが呟くが、謝ることしか出来なかつた
り。

私の母様は勿論、楨久さんも夕陽さんもテンションが高い。まあそ
れだけで無く、新興の我が『両儀』が入学するのだ、これが無名な
らば良いのだが『七夜』と『遠野』の併合した家。注目されるのは
当たり前だ。幾つかの大名からも入学祝と証したモノが届いたしナ
ー。前日にやった祝いの席で見た顔もチラホラ見える。軍国主義の
軍事学校なのだ、此処を卒業すれば軍事組織、延いては末端でも政
治に関わる政治的動きが激しくなるのも当たり前だ。

「べつつにうちも無関係つー訳じゃねーよ」

そんな風にしかめっ面をして答えるシカマル。まあ、そうだろうが、大部分の人間の注目は、私と秋葉、そして、うちは サスケだ。うちは一族というだけで、忍のサラブレッド。そしてそれだけでなく伝説の三忍にも迫るかのような才覚を示すうちは イタチの弟だ。

政治的様相は、少々扱いにくいうちは一族より『両儀』の方が注目度が上だろうが、彼がどのような才覚を示すのか…皆気になっているのだろうか。

しかし、サスケも同期とは、ナルトは居ないようだが。どうなのだろう？これは変化？予定調和？

「まあどちらにしても世は全て事も無し。やれるだけやるだけさ」

「めんどくせえええ…」

シカマル本当、そればかりだなあ。

渡り鳥の比翼

はあ、と溜息を一つ吐く。アカデミー入学から数ヶ月、寒くなってきた。体温と気温の差で白く染め上げられたその吐息は、宙に消え往く。

まるでコイツらの命のようだ。脆く儂い。

私の周囲には十二の死体。雲隠れの忍だ。

それなりに強かった。しかしそれなりだ、余り大した戦闘では無かった。が彼女にはそれなりに良い経験にはなっただろう。下忍とは云え忍との戦闘、与えられた情報の齟齬、そもそもの条約を結んでいる筈の忍の敵対行動という異常性、二度目の実戦としては実りが多い。そう思いながら、息も絶え絶えに座り込んでいる、藍色が掛かったショートカットの少女を見つめる。

「さて、帰りますか、シエルさん行きますよ？」

「ハッハッハあーふうーすいません、もう少し待ってもらえますか？」

構いません。と伝えると目を閉じて、教えたとおりの瞑想に入るのが判る。

血継限界でも無い彼女は、忍として大成するには少々の荒療治と、弛まぬ鍛錬が必要なのだが彼女は良くやっているだろう。

実際の初戦闘、初の殺しそれを超え、二度目の殺人、それができた。

これからどう云う変化を齎すかは『七夜』の私には判らないが、願わくば彼女の未来が醜くも輝いている事を願わずに居られない。もう彼女は家族の一員なのだから。そんな事を彼女が我が家にやってきた時の事を思い出しながら願う。

「こゝよみゝお客さんだよゝゝゝ」

シカマルと将棋を打っていると、教室の入り口からいのの元気な声がする。

昼休みに入り、疎らな人の中で数瞬こちらに意識をやる人間が居たが皆そそくさと目をそらす。

「つち」「こつちだよ」

そんな他の人間の態度が気に入らないのか、舌打ちをするシカマルに苦笑し、代わりに返事をしてくれたチヨウジに感謝しながら、いののを待つ。

「まゝったこんな所でウジウジと将棋なんか打っちゃって、性格まですでウジウジしちゃうよ?」

「うつせえよ、んで? 曆に客なんだろ? 珍しいじゃねーか」

曆に関しては心配ないだろうけどねー。と朗らかに笑ういのと煩そうにそれを手で追いやるシカマルの言葉を聞きながら、私の注目は、いのの後ろに居る女の子に注がれていた。

藍色のショートカットの女の子。そう表すだけでは何処にでも居る誰とも知れないが、少なくともこの子の顔は知っている。数日前から時々視界の隅に入っていたのもあるが、この人の名前も顔も似ている人を知っているのだ。

「あの、『両儀 曆』君ですよ。私、七崎 シエルと云います。宜しく願います。」

「知つてのとおり、両儀 曆です。初めまして、と云うべきかやつとと云うべきですかね？」

うつと痛いところを突かれたかのように、顔を歪めるシエルと名乗った女の子は、『月姫』の『代行者七位』にそっくりの顔をしていたのだ。

「それで、どんな御用向きで？」

「あの、色々見ていたのは謝ります、ごめんなさい！」

シカマルの指揮で席を離れた一団から少し距離を取り、話しはじめる。

「ああ、別に怒ってませんし、この数週間で視線には慣れました、此処にこうやって来たのは理由があるんですよ？いのが無理やり連れてきたという可能性もあるけど……」

ある程度実家で既に忍として仕込まれ始めているシカマル達にもバ

レバレの観察だったのだ、焦れたいのが強襲というのも考えられる。というより、こつも主要人物が集まると死徒二十七祖まで出てきて違つお話にならないかという方が心配だ。マジパネエ。

そうなつたら魔術師は私だけ…？直死で死徒狩り？笑えんわ。

「いえ、いのちゃんは良くしてくれて私が両儀君とお話をしたいとお願いしたんですよ」

「お話…ねえ？良いですよ、今からですか？」

少々込み入つた話になるので、放課後にでも。と云う彼女に快諾して、その場は解散した。

「ねえっねっ！今のつてもしかすると！？」

「うっせえぞチヨウジ、つーかそりゃないぜ、だつていのがっふ」

「私が…なんだつて…？」「か、帰つてなかつたのか、いのっ」

そんなやり取りをしている、三人を笑いながら内心面倒なことにならないと良いなーと思う。

まさか真祖を殺すのに力を貸してつとか？

結局、シエルさんの話というのは本人には悪いが、そう大した話ではなかった。

復讐するために力を『与えて欲しい』それだけだ。

そして復讐の栄えある対象者は、『伝説の三忍 大蛇丸』。

『私の両親は、奴に殺されました……。』

それ故に力を求め、彼女は『両儀』の門を叩く。

「話は、判りました。シエルさんが忍を目指す理由も、何処でも無く『両儀』を頼ったのも」

簡単な話、両親が忍の家庭と、それ以外の家庭では能力差が激しい。それは血継限界云々というより、産まれたところから両親に教えられる技術格差だ。身体の練達、クナイの投げ方、印、チャクラ。

色々な点で格差が順々に出来ていく。当たり前だ、技術力は力であり、力は戦場で生きるのに必要不可欠なものなのだ。だからこの世界は平等ではない。

孤児になったシエルさんは、激しい悲しみでどうしようも無かったが生きる一筋の光明を復讐に託した。だが、その抛り所も復興のため、人員不足の為、広く受け入れを始めたアカデミーに入学する事で挫折しそうになったのだと言う。当たり前だ。クナイ一本の投げ

方にも格差が出る。

それ自体は、頑張れば埋めることが出来るだろう、そう思ったが先を知ると愕然としたらしい。

『血継限界、チャクラの量、保護され秘匿された一子相伝の術：諦めちゃいそうになりました…』

そういつて悲しそうに笑うシエルさん。そうこの世界は力無きものに優しくない。

アカデミーの図書室で溝を埋めようと必死に頑張っていたら辿り着いた『禁断の実』。下忍程度でも知りえる知識なので誰でも閲覧できるモノ『当たり前前の知識』が彼女に取っては心を狂わせる毒になった。

しかし、同時に未来を見た。

『七夜』の歴史。血継限界でありながら、その身体能力と磨き上げた技術で他国にも知れ渡る『脅威』足りえる、忍としては異端であり正常な暗殺集団。

当たり障りのない事しか書いていない筈だが、彼女には魅力的だったのだ。

そして、私がアカデミーで見た技術。木の葉の里でも名の売れた『うちは サスケ』を鎧袖一触で伏せた技。これを自分が使えたら『大蛇丸』に届くとは夢にも思わない。

ただ、動いていかないと、動いていないと腐ってしまいそうになるのだという。

「貴方の願いは、聞き入れる事が出来ます。ですが同時に貴方は囚われる事になる、『両儀』の檻に」

「檻……」

「はい、知つての通り『七夜』と『遠野』が併合して『両儀』が産まれました。これは周囲が、知りもしない連中が面白がつて言っているような流れでそうなったのではないのです」

「噂、あれですか？その、『七夜』と『遠野』が手に余る二人を……と言つ」

「そうですね、実際は違つんですがどうやらそう思わせたい連中が居るようで……」

そんな面倒な事にも首を突っ込む羽目になりますよ？と嘯く。個人的にはどちらでも良いと思う。

『両儀』は新興の家だ、これから先、人を集め育てるのも家を守るのに必要なことになる。その人が家を守り、家が人を守る、そんな『家族』の様な『両儀』を目指す。

復讐と云うのは気に掛かるが、彼女自身、恨みは在るが恨まねば動けなかった過去を引きずっているとも言っている。正気を持ってして考えれば『伝説の三忍』を殺すなんて赤子が狼に挑むようなモノなのだ。それ故に、来るかも知れぬ未来のサスケの様に盲目には成れない。成つても諭せば良い、手助けをすればいい。代わりにこの手で大蛇丸を殺しても良い。

ただ、名家旧家と対を成す歴史を持つ『七夜』と経済力という点で言えば凌駕する『遠野』これらの内に入るのだ。メリットとデメリットが産まれるのは想像にたやすい。

「メリットとデメリットですか…」

「メリットは1つ貴方が考えた通りに『両儀』というより『七夜』が培ってきた技術の指導を得られます。七夜の里から指導員の動員は出来ませんが、というより基本的に七夜に指導員なんて居ません…話は戻って、この身は既に習熟していますので十全な指導が出来ます。1つ、資金面での保護ですね。聞こえの良い話では有りませんが、尤汚い話をこれからするので言ってしまうですが、忍具一式から居住まで保障します。これは勢力の大きい名家例えば、日向、うちは等も行っています…」

指折りしながらメリットを挙げていく、彼女は彼女なりに考えていたことなのか理解の色を示しているので大丈夫だろう。この世界で一番の難解な所は、『子供と大人』の差だ。年齢云々ではなく、前世で云うと少年少女と言える子が大人顔負けの知力を、武力を発揮する。だから、誰がどの程度の理解力を持っているのか、どの程度の覚悟を持っているのか判別が付かない時がある。

それをアカデミーに入って如実に感じた。これも『格差』なのだろうか？

そうなのだとしたら、私の云わんとしている事を理解しつつある彼女は、彼女が言うほど恵まれていない訳ではないのだろう。それが望んで得たものではないとしても…。

「デメリットは、既に理解していると思いますが、『両儀』の一族

という扱いになります。権利には義務を、ですね。『両儀』に降りかかる貴方が本来受ける筈でない火の粉が降りかかる可能性もあります。そして『両儀』と共に死ぬことになるやもしれません。『当主の為に身を差し出せ』等と言うかも知れませんか？」

他にも色々在りますがと付け加えながら、クスリと思わせぶりに殊更邪悪になるように意識して笑う。

そんな気は更々無いが、少なくとも適当に弟子を取って適当に放り出す事はできない。

木の葉の未来も、両儀の置かれている立ち居地的に考えてもだ。『七夜』、『遠野』両方の過去の恨みに晒される可能性もあるのだから。

殺しているのだ、殺されもするだろう。

「『両儀』は新興です、それ故に勢力圏を広げる為に人は受け入れます。しかし誰でも言い訳でも、それ程必死に集めている訳でもありません。『家族』たりえる人が好ましい」

貴方は『家族』の為に、『両儀』の為に死ねますか？

そう言いながら私が差し出した手を彼女は…

「どうかしましたか？」

「いや、シエルさんの恥ずかしい発言を思い出していました」

顔を真っ赤にして俯く彼女。

『わた、わたしは！家族を失いました…でも！もしもう一度、違う形でも家族が手に入るのならば…
どんな、事をして、でも守ります…ッだって…だって！もう失うのは嫌なんですッ』

泣きながら私の手に縋り付く、大事な家族の言葉。

それさえ変わることが無ければ、大丈夫だろう。冬の空にそう思う。

渡り鳥の比翼（後書き）

くそ！俺には、はやかったんだ！腐ってやがる！

この流れで行くと原作が目茶目茶だ！

渡り鳥の恐れ

寒々とした空の下、吐かれた吐息の筋が二本空に向かって消えていく。

「面倒だなあ」「メンドクセエ」

シカマルの癖が移ってしまった…。

「怠け癖が移ってしまった、慰謝料を要求する」「権利の侵害だ、使用料を請求する」

「「はあっ……」「」

二人して、溜息を吐く。こんな掛け合いをしても事態は変わらないのだ。

「んでんで、どうするよ？シカマル」

「なんで俺に聞くんだよ、暦が仕切れよ」「だってリーダーはお前だし」

嫌なことを聞いた、といった風にしかめっ面になるが実際そうなのだから仕方ない。

木の葉忍者学校 冬季演習。幾つ物2人1班の編成でサバイバル、三日生き残るのが課題だ。

積極的に殺しに、と言っても実際に殺すのではなく行動不能または範囲内に散って監視している、審判役の木の葉の忍に死亡判定を下

されたらゲームオーバー。

刃物はへたれたサバイバルナイフのみクナイ、手裏剣、起爆札などの殺傷能力の高いモノは携行不可。

基本装備としては、煙玉、光玉、傷薬、等の非殺傷性の忍具一式だ。あと万が一の場合に備えての救難信号弾、これを撃てば棄権と看做される。

まあ、基礎的な体術、忍術、植物の知識、その他のサバイバル知識をある程度叩き込まれたこの半年を実地で感じ取ってもらおうという事なのだろう。

三日間二人で生き残れたら満点、一人なら減点、どちらも死亡でペナルティーとして宿題が増える。

「一日目で全滅するとかどうよ」「残りの日数は教室で缶詰だな」

何より秋葉が怖い…そう伝えたと、シカマルも母さんが…と怯える。判つてることなんだ、最初から言うなよ。

私とシカマルの共通意識として、三日はだるいというのが在る。班編成を伝えられた後、森に放たれ現在は開始の狼煙が上がるのを待つ状況。秋葉もシエルさんもいのもチヨウジも居ない。

秋葉はシエルさんと、いのはチヨウジと、そして。

「何よりサスケがなあ」「っち、エリート君は何が気に入らんのかねえ」

うちはサスケ。事あるごとに突っ掛かって来るのだ。この演習の始まる前もこちらを睨んでいた、確実に私だけを狙ってくるだろう。

小規模な演習でもそうだ。

「さーてね、一部じゃ『鬼才』はイタチと『両儀』の曆、どちらが強い？』なんてネタも廻っているし、気になるんじゃないか？」

「あれだけ手酷くやられて、本当ご苦労様だぜ。そもそも立っている世界が違うつてのに気がつかないかねえ」

シカマルが吐き捨てるように言う。『立っている世界』、才能だとか血筋だとか、そういう変える事のない世界ではなく、既に『一族の長』として『忍』として行動を開始している世界を生き始めている私を彼は、そう言う。

未来に自分が立つべき、立たなければ行けない場所なのだ。

それを身近に感じているシカマルは、サスケの無意味な行動にご立腹だ。

シカマルは少々変わった。皮肉屋で面倒くさがりなのは変わらないが、それでも徐々に先を見始めて動き始めている。家の仕来りだからではなく、自分の意思で…。

『家』を守る事の面倒ごとの多さは、予想以上だったのだろう。

それを『両儀』を何とか切り盛りする私達の話で、感じた。

内外の勢力図の把握、内部の潜在的な敵対勢力の迂遠な敵対行動。語れば切りのない面倒ごと。

それらに、対応する私達の面倒を知っている上での同情であり、遠くない未来の自分に重なる事での、今、面倒にならない内に力を付けていこうという判断。

何せ、幾人かの間者が、それも同じ木の葉隠れの間者が、轡を並べている筈の私達『両儀』に送りこまれるのだ。

それを話してやった時のシカマルの顔は、苦虫を潰した何処ろではなかったが、良い精神作用になったのだろう。父親の奈良 シカクに礼を言われた。勿論、間者の事は伏せるようにシカマルには念を押ししておいたが…。

嗚呼、そうだ、間者だ。

里には広域で幻術の結界が敷かれ、それを突破しても里の住人全てが暗殺者の一族である『七夜』。

火の国の経済の一端を担い他国まで勢力を伸ばし下手な大名より力を持ち、その護衛も腕利きの『遠野』。その両者が存在する『両儀』の情報は垂涎のご馳走なのだ。

内にも外にも…。

他国の忍びが入ってくる時点で頭が痛くなっただが、木の葉隠れの忍だと聞いたときには眩暈がした。

決して口を割るものか、と息巻いていたが相手が悪かった…。

『両儀屋敷の地下王国にごあんない』

「おつ！おい！おい！暦！めんどくせえから呆けるなよ。どうかし
たか？」

「ちかおうこくが…」

「おれはなにもきいてない」

あれは酷い事件だったね？シカマル。「おれはなにも知らない」

多分あれ以来かなー、シカマル君のSAN値がガリガリ減っている
気がするのは…。

「馬鹿！本当にやめろって！ほらお前此処何処だとおもってんの！
？木が在る森じゃねーか！思い出すだる馬鹿っ！」

人工人面樹ってパナイネエ

「やめてクレエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エ」

「あ、狼煙だ」

忍者学校 冬季演習 開始。 但し二名PTSD発症
で戦力低下。

さて、シカマルが立てた作戦は簡単。この演習を面倒じゃなくするための方法。

「で、私たちを集めて何をするつもりですか？兄さん」

呼び名が変わったよね秋葉…ちょっとツンツンされてお兄ちゃん悲しい。

「そ、それはいいの！」「はいはい、秋葉く大きい声ださないようにね」「」

出たな！諸悪の根源の片割れめ！

「何よ！？それ！」「ちかおうこく」

「兄さん、ここで成敗しておくべきでは」

「まさか、貴女も、そんな…！？」

秋葉の目が剣呑になり、シエルさんが錯乱する。「あ、あれは確かに私もちよーっとやりすぎかな？と思わなくはないけど、殆どが琥珀さんが！」

「うばーあー…」「え？なに？どういふこと？」

シカマル返ってくるんだ。チヨウジは…知らなくても良いことは世の中には沢山あるんだよ？

さて、シカマル君が逝って帰らないので、私が説明をします。

この演習を簡単に終わらせてしまう方法を！その為に、こうやって上忍の目も巻いて集まったのです。

用意するものは簡単。『信頼』それだけです。

「信頼ですか…」「今更ですね」「こよみが言うなら信頼するわよ」「お腹空いたア」

チヨウジ、腹ペコキャラは重要だけど男じゃ需要無いよ。

「プライドでお腹は膨れないさ」

地味にかっこいい！

猟犬が獲物を追い立てるかのように、徐々に包囲していく。

演習場はそれなりに広大だが、六人＋分身の術で割ればそれ程広くは無い。何故ならこの身は忍者なのだ。秋葉、チヨウジ、はまだ分

身の術の精度が低いので一体だが、各自最低二体での周回行動。

見つけても、追いつけるだけ。

この作戦の成功確率は実際のところ高くは無いが、様々な要因でほぼ成功を収めている。

1つ、私達の名が売れている事。チョウジ、いの、シカマルは元より、秋葉、シエルも体術の授業に置けるTOPグループだ。私なんて、姿を少し見せただけで月夜の夜道に殺人鬼と遭遇してしまったかのように逃げ出す…いや、間違っただけ無いんだがね。

1つ、この作戦の成否の根幹である、日向ヒナタ、うちはサスケの存在。これは本人たちの性格上、こちらに良い様に動いてくれる。

コンビである、日向ヒナタに私を見つけるように指示しているうちはサスケを眼前に捕らえている事から、作戦の成功確率は跳ね上がった。

「あとは、教師陣の反応如何っだな」

そう呟いて、少しの言い争いをしていっているうちはサスケを眺める。

「だから！両儀 曆を探せって言っているんだよ！」

「うつつでもね？ほら曆君を見つけても、意味が無いんじゃないかな？三日間生き残るだけなんだから、白眼で逃げれば…」

「逃げる！？俺に逃げれって言うのかよお前は！ッもう良い！」

「あ、う、うちは君…うう、どうしようでも、曆君に、」

どうやら、コンビの争いのようだ。私を倒したいサスケに、それをしたくないヒナタ。

ううむ、戦場で大声を出すのもアレだが、忍としての訓練の評価としてもヒナタの方が高い。

別に私を倒するのがこの演習の目的ではない。それどころか誰とも戦わずとも逃げ延びれば良い。

手段と目的。これを理解させたいのが、この演習の目的でもあるのだろう。

「取り合えず、狩るか」

私達の作戦達成の為、直接戦闘だと私以外抑える事のできない、うちはサスケは邪魔だ。シエルさんでも五分位には持っていけるだろうが、手加減が出来ないだろう。

ヒナタの方は、戦闘の意思が無いならそれでいい。

そう内心で結論付け、歩き出しているサスケに上から踊りかかる。

「!?!?両儀いい!」「速さが足りないッ」

サービスで反応できる程度の隠行で襲撃すると、まるで劇中のような叫び声で振り向かれた。と同時にカウンターの回し蹴り。本当に

シエルさんの挫折もわからんでもない。が、既に補足された時点で
終わりだ。

「森は七夜の巣だ、諦めろ」

その言葉を刻みつけ、意識を刈り取る。

「こ、暦君!？」

「よーヒナタ、こんな所で奇遇だな」

そんな冗談にもあたふたとどう返事すればいいのか慌てるヒナタに
笑いかける。

提案がある。

それは甘美な悪魔のささやき。

「で、結局なんで私達だけが反省文書かされてるんだよ?」

「知るか、めんどくせえ。首謀者って言ったら暦だろ!?!なんで俺
まで!」

「作戦立案は、お前だからな。陣頭指揮は私だが…」

「他のやつ等がお咎めなしなのが気に入らねえ！」

「責任者は責任を取るためにいるんだよ、シカマル」

「自分で結論を言ったりや仕様がねーな」

結局作戦は成功。

演習場中央に、他の人間を追いやり、それと出くわしてパニック状態の所に閃光玉を投げやり同士討ち？を誘発させ、崩れたところに降伏勧告。

私の威光とうちはサスケの死体（死んでないが）により大人しく降伏し、全員に棄権の信号弾を撃たせて終了。

残ったメンバーで残党狩り、その後キャンプでもして残りの日を過ごすか言うことに、

そうなる筈だったのだが、ちょっと類を見ない終わり方に処罰を食らった。

「完璧だったんだがなあ、残りは味方、敵は排除。ならば団欒でも構わないだろうに」

「設定上は敵つー設定だったからだろ、融通が利かなくてめんどいぜ」

「それこそまさかだ、私が、私たちが裏切る筈もないだろ？ 『仲間』で『家族』なんだ」

シカマルじゃないが、全く融通が利かなくて困る。

「ん？何だシカマル、その馬鹿みたいな顔は、馬鹿というシカの種類は居ないぞ？」

「うっせえよ！つーかあれだ、何だ？俺たちも、俺も、いのも、チヨウジもその、『仲間』なのか？」

嬉しいやら何やらで何時ものしかめ面が崩れそうなシカマルに笑ってしまふ。

男の照れてる顔なんて一山幾らだが、ここで冗談で場を壊すのは無粋だ。

「勿論だろうさ、シカマルもいのもチヨウジも大切な仲間だ、守り守られるっな」

これは私の本心の言葉。

渡り鳥の恐れ（後書き）

お薬の時間ですよ

渡り鳥の舞い

血霧が舞い飛沫をあげる。何のことはない、何時ものように殺しているだけだ。

「はあ、しかしどうにかならんものかね」

「仕方ありませんよ、人手不足なのですから」

こちらの独り言に律儀に返してくれるシエルさん。風情は堂に入ったモノで、諸般の事情もありまだ下忍としても登録されて居ないが、任務中のみ特別下忍扱いだったりする。特別下忍と言っても下忍と変わらず、早期に実戦を経験させたい私の方針でゴリ押しされたモノ。

木の葉としても、『両儀』は七夜のように単独での戦闘ばかりでなく、『複数人』でのチーム活動をしてもらいたいという思惑で、許可された背景もある。とは言え、アカデミーに在学しながらの活動というのは、他の生徒も悪影響を 例えば自分もだとか言いかねないので、『七夜』から『両儀』への下請けという形で取っているのが表向きは、特別下忍なんていうのは存在しない。

ある程度の地位に居ないと知らないのではないだろうか？

アカデミー自体にも、『両儀』の仕事で…と言いつづけているし、まあ仕事は仕事なのだが。

お蔭で秋葉も実戦に出れるようになったのを喜んでいたが…。お兄ちゃんは心配です。

「兄さん、こちらは終わりました」

「了解、じゃあ目的のものは手に入れたし撤収」

私のアカデミー生活は何処へ行つたのだろうか…。

そう思いながら戦闘地から撤収する。

「雲隠れか…」

「ですね、額宛もしてませんでしたし軽く尋問しましたが無意味でした、が、体術の特徴が一致します。無論証拠としては芳しく無いのでこれも意味がありませんが、取り合えず大名家から盗まれた書類は奪取しました」

「ああ、それと下手に捕虜にしたりして本格的に尋問しても、面倒にしかならないので殺しておきました」

「そうか、判つたスマヌな。面倒を掛ける」

はい、それでは。と火影との会合の場を辞す。

『両儀』は順調に育っている。基が名のある二つの家名の併合した家だ、無論出先機関のような形とも言えるし人数は、実働出来るのは私、秋葉、シエルさんの三人な上、秋葉とシエルさんはアカデミーを主軸に屋敷で鍛え上げ中なのでそれ程実践に出せる訳ではない。

諸般の経理事務や財政管理は琥珀さんがしてくれているので助かつ

ている、

だが、それ故に軽いのだ。私一人なら大抵の場所に目標に気取られる前に辿り着き制圧出来る。

そして、『見なかった事』に出来るのだ。

他の木の葉の人間では、どうしても動揺してしまう事でも『見てない』『知らない』ので『無かった事』に出来る。依頼も火影から直接受けるのではなく、『七夜』を通して受ければ磐石。

木の葉を通して受けた仕事でも、『無かった事』は火影に直接報告すればいい。

それ故に、こういう風に火影と個人的な会合を設ける事が出来る。

しかし、さてさてこれが吉と出るか凶と出るか…。

「ただいま」「お帰りなさい曆さま、お夕食のご用意が調っています」

宵闇の散歩、それを終えて帰れば、暖かい『家族』が居る。この暖かさを守る為に邁進しよう。

「どづか、なさいましたか？」

「いいや？翡翠ちゃんは何時もがんばっているなっとな」

・檄・突・斬・檄・檄

高速で飛び込んでくるシエルさんが投げた長剣を撃ち払い、一回転し避け刺突。秋葉の影分身を切払い、二人を制圧する。

「カツハツ」「ぐうっ」

「終了、かなっ」

その宣言に、琥珀さんと翡翠が治療に当たる為に駆け寄るのを見遣り、倒れた本人たちもチャクラを集中してヒーリングに入るのを確認して場を辞す。治療のために服を肌蹴るのだ、一度迂闊にも見てもしまった後は酷かった…。

二人の習熟度は上々、戦闘能力判断力ともに実戦を経験して自分の足りない所を明確にしたのが良かったのだろう。体術、忍術、個人スキル共に良い塩梅だ。このままで良い。

幾つかの外來の、私がこの世界に生れ落ちる際に手に入れている知識を『両儀』の秘伝として扱っている。この屋敷にも、それは流用されている。防備は万全。

あとは方針次第…それを決めかねる。

幾つモノ螺旋。幾つモノ思考。幾つモノ結果。幾つモノ未来。その先を見通し最善をこの手に、最良をこの手に掴むため…。

「兄さん」「曆君?」「曆さん」「曆様」

「ん?終わったか、なら補習だな」

ひとつひとつ片付けていこう。

渡り鳥の苦勞

両儀 曆です。現在三代目火影の召集で、会議室に集まっています。

こう、言い表せることのない状況というか、空気です。誰か助けて！。

理由は簡単。うちは一族大虐殺が起きたので、何がどうなっているのか理解できない人間と恐れていたことが…なんて人間や現状把握に忙しい人間などがゴチャゴチャになって統制が取れていない。

現状で確認されているだけで、死者は町1つ分全滅。大喰らいだ。

生き残りはうちはサスケのみ。容疑者はうちはイタチ。何かしらの変化が在るかと思っただが、結局作戦は実行されたようだ。そしてこちらにも余計な手出しはしていないので、変化はなし。

ただ、一つ。うちはイタチと面識がある。

事が起きる1週間程前に、うちはサスケの身柄の安堵を頼みに来た。

事の真相と幾つかの情報を手土産にだ。何故、両儀に？と思っただが簡単な話。三代目火影は信用が出来る、というより忍として上に立つ人間として『甘い』それに漬け込むのは容易だ。

そして三代目と力のバランスが取れている、そもそも今回の首謀者『根』とは取引が成立している。

ならば最後にそれらも知らぬ、第三者に依頼をすれば三竦みの出来

上がりと言ったところらしい。

他の旧家に頼らなかつた、というより話す必要が無かつたのは、『両儀』が一番過激な事を言える立場に在るのだ、例えば、生き残つたサスケを理由を付けて危険と見なし殺害する、投獄する等…。他に言えるとしたら日向一族だが、あそこは自分にも負い目がある。なので唯一の『外に勢力を持つ内部浄化機関』に近い『両儀』が恐ろしい。

本気で、両儀がサスケの排斥を考えたなら、容易に行えるだろう。

それだけの地位に発足から二年で付いた。

長く酷い戦争、荒れた自領、失つた肉親恋人、幾つかの大事件。戦争の傷も癒える暇もなく、色々な事がありすぎた。

そして、その傷を使って心を揺さぶる勢力も多い。それ故『内部浄化機関』として『両儀』は動いた。

『遠野』の情報網を使い、それを更に忍との情報網と繋げ、『七夜』の武威を示す。

表沙汰には成っていない幾つ物面倒ごとを解決して、『両儀』はそうそう壊れることの無い地位を確立した。面倒ばかり増えたが…。

そもそも箔付けというより、木の葉隠れの忍者学校を卒業した忍の一族という建前が必要だけだったのだが…。中央に関わらずアカデミーでぐだぐだしていたかった。寧ろ二つ上のクラスで留年しているナルトに追いついて原作通り一緒に中忍試験を受けるのが一番安全牌なのだ。知っていることと知らない事。その違いは大きい。だが木の葉の人員不足の切迫度が許しはしてくれない。

御蔭で幅広く動けるようになったので木の葉内部は結構きれいになったが、多くの人間は知らないだろう。しかし、それで良いと思う。知らぬ人間に知らせてもいい事は無い。清濁併せ呑むなんて芸当を全ての人間が出来る筈も無いのだから、上に立つ人間が優秀ならそれでいい。少なくとも三代目火影は、『甘い』が『優秀』だ。

「うちはサスケは儂預かりとする、うちはの管轄領地などは一部を除いて木の葉管理にする。以上、それとうちはイタチに付いてだが…」

「暗部を送るのは駄目ですね。三忍クラスの人間を送るなら別ですが、無駄に人材を散らすのは現状では致命的です、放置が望ましい」「む、そうか、」

私の一言で、静まる場。この場を利用して貰う事にする。

「隠しても仕方ないので言いますが、一週間ほど前にうちはイタチと斬り結びました。まあ命を賭してという訳でなかったので、多少の怪我で済みましたが…強いですよ」

「どういう事だ、と声上がる。まあそりゃそうだろう行き成り首謀者と戦闘したと言われても、ねえ？」

とある人間から凄まじい圧力が掛かる。が気にしない。人が与える『死』の幻想なぞ、言葉の通り幻想だ。私には『死』が見えるのだから。殺気なぞまやかしにもならない。

「敵情視察、でしようかね？もしくは、『両儀とうちはどちらが強
い』なんていう噂を最後に確認しに来たのやもしれません。兎に角
最悪待ちに徹されると暗部でも荷が勝ちすぎてます。警備の主幹を
握り、木の葉の中心に勢力を持つていたうちはが全滅した以上、こ
れ以上の人員不足は致命的かと」

何より、そもそもうちはイタチはその暗部の分隊長に登りつめた男。
こちらの手は知られているでしょう。そう閉め括ると、場は一層静
かになった。

正直なところ、この先の事も考えるとサスケを殺しておきたいが、
取引云々よりうちはイタチの省みぬ特攻など食らえば屋敷ごと吹き
飛ばされかねない。それは駄目だ。正直大蛇丸、ペインの木の葉崩
しも

我が家に影響が無いのなら無視をしても良いが、イタチの天照・須
佐能乎は屋敷の防壁が耐えられるか判らない。

ならば、先ずはうちはイタチを殺すかとも思ったが、うちは一族の
暴発は確実だったのを彼が止めてくれたのだ。正直言ってしまうと、
中央政治の不備で起きる暴動を私が制圧しても余計な恨みを買うだ
けだ。特にうちは一族は一族外にもシンパが居るのだから。敵なら
ば殺せば良い、だが一応の味方の恨みなど面倒にすぎない。最終的
に里を絶滅させるか、武力制圧で火影に？馬鹿馬鹿しい。
なので、うちはイタチに無干渉を約束した。

サスケは、復讐でも何でも勝手にやってくれば良い。それに意味
があるかないかなんて関係無いのだろう。

どれだけうちはイタチが強くても、一瞬でサスケの元にこれる訳で

ないのだから、現状維持が一番良い。結局はそういう事をイタチも考えて、私への、『両儀』への依頼だったのだろう。

イタチからの手土産は多い、互いの家族が首輪となって傷つけ合う事は無い。ならばこれで十全。

「それでも、若し『写輪眼』と術などの情報保全の為に追っ手を放つというならば、『両儀』と『七夜』は手を出しません」

臆したかなどの声は拳がらない。表に上がっているだけでも、里の状況などから守勢に廻っている他の人間より多く実戦に出ている、言わば里の防人。軽んずる発言は出来ないだろう、目では不満そうな人間は幾人が居るが、ね。

「ううむ、お主の言いたいことは判った、では追忍はうちはイタチと接触・戦闘をしないレベルで放つ、これは決定だ。そして指名手配も掛ける。こちらは余り意味が無いだろうがな……」

「以上を持って、今回の件の処置とする」

「で、何か御用ですか？志村ダンゾウ殿」

「なに、最近呼び声の高い『両儀』の当主の機嫌を伺いに、な」

うさんくせえ。伏し目がちなので今一感情が判らないが、少なくとも木の葉の里で今まで出会ったどの忍よりも忍らしい空気が漂っているのは『未来と過去を知っているから』ではないだろう。

呼び止められた橋の周辺には他に気配が2人。ダンゾウ自身も動けるのは知っている。

やるならば向こうの先手で、正当防衛を理由に派手に飛ばして、正当な理由で社会的に殺した後に殺す。ああ、面倒だ。殺すのに手間を掛ける時点で違う。

「同じ里の人間で腹の探りあいなんぞ面倒なのでしたくありません。うちはイタチの事でしよう?」

「ふっ、判っておるといふ事は知っておるといふ事だな。あやつめ…」

「それで、口封じですか?」

「無理なことにはせん、意味の無いこともせん、唯何処まで知って、どうするのかというのが聞きたかったただけ。もし、面倒な事を引き起こすようなら…」

ダンゾウのチャクラが軋み、他の二人も動く。だが…。

「下らん、私に勝てると思いがっているのなら、良いだろう掛かってくるがいい。その瞬間貴様の『意図』は切れるだろうがな」

この風の強い橋を選んだのは間違いだったな?既に『糸』は張り巡らされている。とは言え出鼻を挫くのが目的で開戦はまだだ。部下も驚いているようだな。

「ふむ、身体が動かん、ワイヤーか…」

「鋼糸『糸錐』というらしい。先日の報酬の一部で良い武器商人を

紹介してもらってな。前からこの手の技術は使えては居たんだが、どうにも手に入るワイヤーでは太すぎて忍には視認され気が付かれるが、これは良いな、あんたのような経験豊富な忍でも気が付かないとは……」

少々やり難い相手ではあるが、あその武器は質が良い上に妙な今まで色々置いてある。イタチに感謝してやってもいい二秒くらい。

「まあ、信じるか信じないかは別として、私は今回の件で動くことは無いよ。表でも裏でもな。サスケにも手は出さない。私は私達の平穏が大事だ。前時代の人間の尻拭いで要らぬ禍根を残したくないそれをイタチが全部持っていつてくれるならば、願ったりかなったりだ」

「痛いところを突きおる。前時代の尻拭いか……」

ダンゾウの鋼糸は、解く。信用が欲しければ、こちらから歩み寄る必要がある。潜在的な敵ではあるが、敵対する要素がないなら無い方が良い。

「そうだろうさ、里を起こした千手一族とうちは一族、何がどう違うのかその時代に生きていない私にはわからんし、知らぬ問題も在ったのだろう。だが相手はこの時代に生きている人間だ、共に里を起こした一族でこうも違う。それがまだ互いの一族が生き残っているなら別だろうがな？だが、弟子の系譜とは言え三代目は千手一族ではない。火影座を賭けた争いに敗れるならまだ良からう、里の人間が選んだのだ。だが、現実には惨めにも外へ外へと追いやられ、しかし里の者は『うち』の名前に羨望を送る現実の差異。そして里の動乱、勘違いもするだろうさ、我々が正さねば。これぞ里への真の忠義。などとな、あんたらの失敗だ。恐れず飢えさず飼い殺せば

良かったのだ、中央の適当な役職を与え、うちはの人間を広く分布させるべきだった、そうすれば余計な雑音が増え意思の統一なんて出来なかっただろうに」

「耳が痛いと言つべきか、若造が知った風に嘖ると言つべきか」

「どちらでも良いさ、既に起こったことだ、この話に意味は無い。何度も言うが私は私の家族が守られればそれで良い、勝手に殺しあっている」

「貴様もヒルゼンと同じで及び腰か」

「七夜は知っているだけだよ、無意味に振るわれる力に意味は無い。殺すのに躊躇いはないが、それは己が武を抜いたときだけ、そして抜くのに躊躇いは無い」

「ふん、ヒルゼンよりは、マシということか、まあ良い貴様の考えも判った、貴様も貴様の家族にも手は出さん」

「それは十全、ご理解頂いて恐悦だ」

口の減らん。と吐き捨てるように言うと、ダンゾウとその部下は帰っていった。安心は出来ないが、どうやら手を出さないというのは本心のような。まあ、少なくとも『両儀』の上げる捕虜を考えると余り意味が無いというのもあるしな。

「しかし、これから面倒しか起こらないんだよなあ」

どれ程時間に空きがあるかはわからないが、これから先を思うと憂鬱だ…。

渡り鳥の苦勞（後書き）

うちは一族ってあれですよ。結構不遇。

うちのオリ主も結構酷いこといつてますg

渡り鳥の就職

目の前には、五体の襷褌雑巾が「ちよつとっ」「失礼。

「なに人のこと襷褌雑巾扱いしてんのよ…」

「いや、だって見たまんま襷褌雑巾だし。ねえ？」

悔しそうに突っ伏するいのにそう言つと、抗議の為に挙げていた顔も落ちる。ぐうの音も出ないという奴だな。うん。

屋敷の訓練場といつても唯の森ではないか、不燃のルーンやらで強化されたり、一定の木々に触れると平衡感覚を失ったり、下手をすれば、ちかおうこくおくり…。まあそんなデンジャーでデッドな訓練場で

襷褌「おなかすいたツアー」雑巾、が五体。秋葉、シエルさん、いの、シカマル、チョウジだ。

「んじゃ、各自規定の型をやつて、朝食かねー」

元気な声が広場に広がる。二倍にしても大丈夫そうだなあ。

「今、兄さんから不穏な雰囲気…」

気のせいだよ、秋葉。お兄ちゃんの愛情は優しさでできています。

「…というか、心転身の術もシカマルの影真似の術も利かないってどういふことよー！？」

「序に曆君には幻術も利きません」

「お薬も利きませんよねー」

琥珀さんちよつと待って。何お薬って？

「冗談ですよ」

シカマルウウウウっ!？

「うっせえ、俺に振るな面倒くせえ」

「琥珀は何時ものことです、それで幻術もいやシカマルの術が利かない理由があるのですか？」

慰めてくれるのは翡翠ちゃんだけだね…。とお茶を煎れてくれる翡翠に癒される。

「まあ、何だ。幻術も心転身の術も影真似の術も、『自分のチャクラを媒介にして、対象のチャクラに親和させ、効果を及ぼす』って事だ。正直な話、『身体エネルギー』と『精神エネルギー』というのがどの様に発生、蓄積されているのか、そもそも術の印の関連性、術そのものの効果が具現化する過程などは殆ど解明されていないので、置いとく。つまりだ、簡単に言ってしまうと、影真似の術が説明しやすいな『自分の影』にチャクラを浸透させ『対象の影』と繋ぐことで『チャクラの線』を繋ぎコントロールする」

此処までは良いか？そう問うと、チヨウジ以外が頷く。チヨウジエ…。

「んで、私に利かない理由というのが『チャクラの質』」

「チャクラの質？」

「ですか？」

「『チャクラの質』というのは単純な量だけの話ではなく、『チャクラとは身体エネルギーと精神エネルギーを練り上げたモノである』というのに付随する話だ。要するにお前たちの使う1のチャクラと私が使う1のチャクラでは練り上げた総量が違う。ということだな。総量が違えば、親和するためのチャクラも多く必要になる。家の二人の稽古にも入っている『瞑想』はその練る過程の練習でもあるな」

秋葉とシエルさんはまだ、無効化までは行かないが抵抗は出来る。そして抵抗出来ればその間に解除する事も出来る、程度の差はあれ上忍クラスにも同じ事が出来る人間は多いだろ。暗部とかは薬品使用したりするしな！。

「だから、チャクラの量が豊富な忍、または私のように多く練られたチャクラを使用する忍には幻術などが抵抗されたり、利かなかつたりする」

「成るほど、唯掛けるだけじゃなくてそういう面でも打ち勝たなきゃいけないのね…」

「というか、普通に両親たちに教えて貰えるだろうに」

少なくともチャクラのコントロールと瞑想からの練りはある程度の家なら周知の情報だ、特に奈良家と山中家の術は練りが大切だ。

「ん〜取りあえずうちは、術の基本と心転身の術の危険性とかが基礎かな？まだ発展までは……」

「俺んちもそうだな、つーかあれだ薬学もあるからめんでえ」

まあまだ基本を徹底させるという事だろうか？週1とは言え、我が家の朝練に参加する許可を貰ってきたのだから、怒られはしないだろうが、余計な話をしたかな？

そして一言も喋らないチヨウジはブレないなあ。

さて、うちはイタチのうちは一族虐殺から1ヶ月が経った。この衝撃的な事実里全体が揺れ、色々な人が色々な思いを、考えを、影響を受けただろう。

うちは一族に近かった人間たちは、現政権の在り方に疑問を持ち。それ以外の、忍以外の間人は『あのうちは一族がたつた一人に絶滅された』その自体に恐れを感じた。

そんな色々で複雑な政治的思惑が入り乱れ、一つの議案が火影の支持の元、通り成立することになった。

『木の葉隠れ忍者学校、卒業最低年齢の設定法案』

これまで、戦乱や幾つかの事件で起きた慢性的な人員不足の為に設定されていなかった、アカデミーの卒業最低年齢の設定だ。これに

より例外を除き、最低年齢に満たない人間の繰上げ卒業を禁止した。

その設定年齢は12歳。基本的に六年の教育課程が存在するアカデミーは前世的に言えば小学校に当たるだろうか？色々違うことは多いが…。

表向きは、精神性の成熟を促す為に必要な措置、そして若い芽を潰すようなことを慎む為に、大人である既に忍となっている人間が、次代を担う子供達を守り慈しむとかなんとか。

各自色々な思惑があった様だが、特に問題なく通った。

誠実な人間には、『大人が子供を守る』という綺麗な言葉が受け。大衆にも受け入れられ火影の英断は支持率を上げる事になった。

無論、私も支持に回った。だって、まだアカデミーに在籍している私もこの枠に入ってるのだ。

年齢は、10歳。シカマル達、それにナルトと卒業かー、班編成どうなるのかねえ。等と思っていた。

「く、りあげ卒業だと…!？」

「うむ、知つての通り人が足りん。今までのように裏で動いて貰う時間も余裕も無いほどにな…」

少々キャラがぶれた私をスルーする感じで三代目火影は続ける。

まあ、木の葉の警備を主幹としていたうちはが全滅だからな、その一まとめにしたのもクーデターだかテロだかの機運を増長させる行為だったのも皮肉だが。

「お又シの所の二人、秋葉、シエルだったかこの兩名は実働しているようだが、まだ幾つかの術などはアカデミークラス。それに『両儀』の先の事も考えると、同年代の知り合いを作るのは必要じゃろ？だから、当主たるお又シだけ。ということじゃ、本来ならその二人も繰り上げさせたかったのじゃが…」

「あーいえ、妥当だと思います」

妥当だ、秋葉は『血継限界』の制御に時間を掛けていたので戦術面では中忍クラスでも、少々のムラがある。シエルさんも同上というより、『鉄甲作用』と体術の指南、で一杯一杯。

『縁』というのも大事だ。

「では、下忍ということですか？」

「うむ、中忍に推薦という形でも良いが時期が悪い」

期待のエリート出世街道花道を歩いていたうちはイタチが起こした事件を考えると自粛せざるおえないだろう。特に『両儀』は目立つ。そして目立つが故に木の葉は健在！というのを内外に示すために中忍試験は正式に受ける必要があるだろう。

「なので、下忍に繰り上げ卒業、機を見て中忍試験を受ける形になるな。一番妥当なのは又シの家の三人でチームを組んで、と言うのが一番だろうが。まあお又シにはそれまで我慢してもらうという形で…スマヌ」

「いえ、この身は忍故に」

思っても無いことを言ってみた。あれ、でも。

「私はこれまで通り、一人で動くというかたちで？」

それならそれでも良いのだが、木の葉全体としては暗部と住み分けできるように両儀には『三人一組』乃至は『四人一組』のチームで動ける経験蓄積が欲しいだろう。その為の私であり、『両儀』と態々名前を変えてまで、ゆつくりと里に馴染ませるのが方針なのだから。

「いや、里の全体規模で小隊を再び編成しなおす事になっておる。じゃからその中で頼む」

「なるほど、了解しました」

確かに、うちはが抜けた穴を塞いだりで人事異動は激しいものな。そう思いながら木の葉の額宛を受け取り場を辞す。

正式に忍として、登録されるのだ。面倒ごとが増えるな。

渡り鳥の就職（後書き）

次はあの人が登場！？ 決まってるない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4820s/>

渡り鳥の詠う詩

2011年4月22日19時34分発行